

出雲弥生の森博物館

研究紀要
第2集

西谷2号墓の復元整備

三原一将

神戸川流域における暗文土師器

高橋 周

矢野遺跡出土の檜扇について

原 俊二

鷺浦遺跡出土の陶磁器

西尾克己

瓦礫陶拾遺 その2

花谷 浩

**出雲弥生の森博物館研究紀要
第2集**

PL. 1 復元整備後の西谷 2 号墓（東から）



出雲弥生の森博物館研究紀要

第2集

目 次

Contents

西谷 2号墓の復元整備	三原一将 1
Kazuyuki MIHARA	
A Restoration Study on the Nishidani No. 2 Tumulus	
神戸川流域における暗文土師器	高橋 周 13
Shu TAKAHASHI	
A Study on the Kinai Type Haji Pottery Unearthed in the Kandogawa River Basin	
矢野遺跡出土の檜扇について	原 俊二 21
Shunji HARA	
On the Ancient Wooden Fan Discovered in Yano site	
鶴浦遺跡出土の陶磁器	西尾克己 25
Katsumi NISHIO	
A Short Report on the Ceramics of Sagiura site	
瓦砾陶拾遺 その2	花谷 浩 29
Hiroshi HANATANI	
A Study on the Collection of Chiyoae and Tsuneo Hasegawa, part 2	



復元整備後の西谷 2号墓（南東から）



復元整備後の西谷 2号墓北東突出部



西谷 2 号墓展示室



中心主体の展示



第 1 主体の土層パネル



ミラービジョンで現れた中心主体の像



矢野遺跡出土の暗文土師器（上：A群<畿内産>，下：B～D群）



3



2



1

鶴浦遺跡出土の陶磁器 (壺(1)とその内面(2), 鉢(3))

西谷2号墓の復元整備

三原一将

1.はじめに

島根県出雲市大津町に所在する西谷墳墓群は弥生時代に築かれた大型の四隅突出型墳丘墓が集中する遺跡で、2000年（平成12）3月30日に国の史跡に指定された。

以後、出雲市は四隅突出型墳丘墓の保存修理工事を行いながら史跡公園としての整備を進め、2010年（平成22）3月に西谷墳墓群史跡公園「出雲弥生の森」が完成し、4月29日には隣接地にガイダンス施設となる出雲弥生の森博物館も開館した。

この史跡西谷墳墓群の整備事業の一環で西谷2号墓（以下2号墓という）の復元整備を行ったが、本論ではこの復元内容、特に墳丘の復元を中心に述べたい。

なお、2号墓復元整備の実施設計¹は2008年度（平成20）に、工事²は翌2009年度（平成21）に行なった。

復元整備前の2号墓は、墳丘の大部分が削り取られている状況であった。西谷墳墓群の周辺

では良質な土が採取できるため、かつては大津瓦の土として利用されてきた。2号墓の土も陶土として採取された結果、墳丘の中央から北側にかけて大きく削り取られ、南端がかろうじて残っている状態となっていた。

2.2号墓の調査と復元

西谷墳墓群では国の指定を受ける前に、詳細を把握するための発掘調査が行われている。

2号墓は1980年（昭和55）に出雲考古学研究会によって発見され報告（出雲考古学研究会1980）がなされた。それ以降、島根大学考古学研究室や出雲市教育委員会によって測量調査や発掘調査が実施してきた。これらの調査成果の概要をまとめると表1に示すとおりとなる。

2号墓の復元整備前の時点では、2002年（平成14）と2004年（平成16）に行なわれた発掘調査に基づき作成された復元案（坂本2006）が、それまでの調査成果を集約した最新のものであった。

一方、2号墓の具体的な復元方針や整備内容については、2008年（平成20）5月に設置された西

表1 2号墓の調査と主な成果

調査年	調査主体	調査内容	2号墓に関する主な成果	文献
1980	出雲考古学研究会	墳丘測量	<ul style="list-style-type: none"> ・分布調査により2号墓を発見。 ・墳丘測量図を作成。 ・南突出部付近で石列の一部を確認。 ・土器の採集。 ・規模を東西方向で突出部を含めて25m、除いて15m、高さ2mとする。 	出雲考古学研究会 1980
1988～1992	島根大学考古学研究室	墳丘測量	<ul style="list-style-type: none"> ・周辺を含めた墳丘測量図の作成。 	藤永2000
1998～1999	出雲市教育委員会	トレンチによる規模確認	<ul style="list-style-type: none"> ・次のとおり規模を推定。 方形部規模：南北約35m、東西約24m 突出部を含む規模：南北42m以上、東西30m以上 墳頂平坦面：南北21m、東西11m 高さ：3.1～3.7m ・2段の立石・敷石を確認。 ・復元図を作成。 	藤永2000
2002～2005	出雲市教育委員会 (04年は島根大学も参加)	トレンチによる範囲確認	<ul style="list-style-type: none"> ・規模を南北36m×東西約24m、高さ3.5mと推定。 (突出部を含めると約50m) ・残丘断面で第1主体を確認。 ・墳丘中央でガラスの腕輪と管玉、水銀朱塊を発見、中心主体があつたことを裏付ける。 ・吉備の特殊盤や器台を含む多数の土器を発見。 ・復元図を作成。 	坂本ほか2006

谷2号墓整備・活用検討委員会（委員長：渡辺貞幸、以下委員会という）で検討が重ねられた。

この委員会では、専門家、有識者、地元代表など様々な立場の委員がそれぞれの観点で意見を出した。これを事務局が集約し、提案・修正を繰り返した結果、次のとおり2号墓整備の方針が順次決まっていった。

- ① 墳丘が削平されている箇所に展示室を建設し、全体を盛土で覆って貼石も施し、墳丘復元を行う。
- ② 墳丘、埋葬施設などを实物大で見せ、体感させるための整備とし、史跡を正しく理解できる外観を重視すること。
- ③ 2号墓の中心主体と第1主体を元位置に近い場所でそれぞれ復元展示すること。その際、3号墓の資料を用いる場合は、見学者に誤解が無いようにすること。
- ④ 展示スペースの出入口は階段とスロープの2箇所とする。墳頂部には安全柵を設置する。
- ⑤ 中心主体はミラービジョンを用いた演出とする。発掘状況を再現し、見学者の操作で復元状況へと切り替わるものとする。

3. 墳丘の復元

以上の整備方針に基づき実施設計を進めたのであるが、ここではまず、墳丘の復元について述べたい。

墳丘の復元は、『西谷墳墓群』（坂本ほか2006）で示された復元案（以下2006復元案という）をベースに行った。2006復元案は既往の調査成果も踏まえたものであり、2号墓の復元整備前の時点では最新のものであった。

よって、これに必要な箇所については修正を加えることで整備復元図の作成を行った。以下、墳丘各所の復元について説明する。

① 墳裾外縁（突出部を除く墳丘外縁）

これまでの範囲確認を目的としたトレント調

査では2号墓方形部の各辺において、部分的ではあるが墳裾外縁に配された石が見つかっていた。2006復元案ではこれらをつなぎ、または、延長することにより墳裾外縁ラインを復元している。遺存している配石に基づく復元であり、示された突出部を除く墳丘規模が東西23.5m、南北35mであることはほぼ間違いない。よって、今回の整備復元図においてもこれをそのまま用いることとした。

② 墳裾の配石構造

既往の調査では、墳丘の北側や南側で2段の立石・敷石が確認されており、特に北側は遺存状態が良かった。この発掘成果に基づき、今回の整備復元では墳丘外縁に2段の立石・敷石を巡らせることとした。

③ 突出部

これまでの調査で2号墓の突出部については、その先端を確認できたものはなかった。2006復元案では、西谷墳墓群で唯一突出部先端が確認できていた4号墓の南東突出部を参考にして突出部の長さを推定復元している。

しかし、2号墓は細尾根上に築かれており、突出部の長さはこの地形にかなり制約を受けることが想定された。つまり、突出部が長くなると丘陵斜面に差し掛かるところから、2006復元案で示された長さの突出部を作り出すことは困難だと想定した。

このため、2号墓の突出部では最も残存状態の良い配石が確認されていた北東突出部の痕跡から、あまり長くならない箇所に先端が来ると思定して、突出部の長さを推定した。そして、この突出部の長さを他の突出部にも摘要することで4箇所の突出部を復元した。

なお、突出部の上面は3号墓の発掘調査成果に基づき、馬の背状に丸みを持たせた復元としている。

④ 高さ

墳丘の高さの手掛かりとなるのは、残丘部の

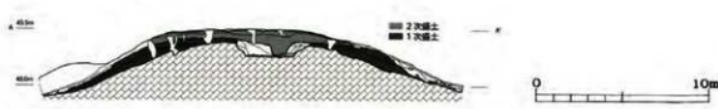
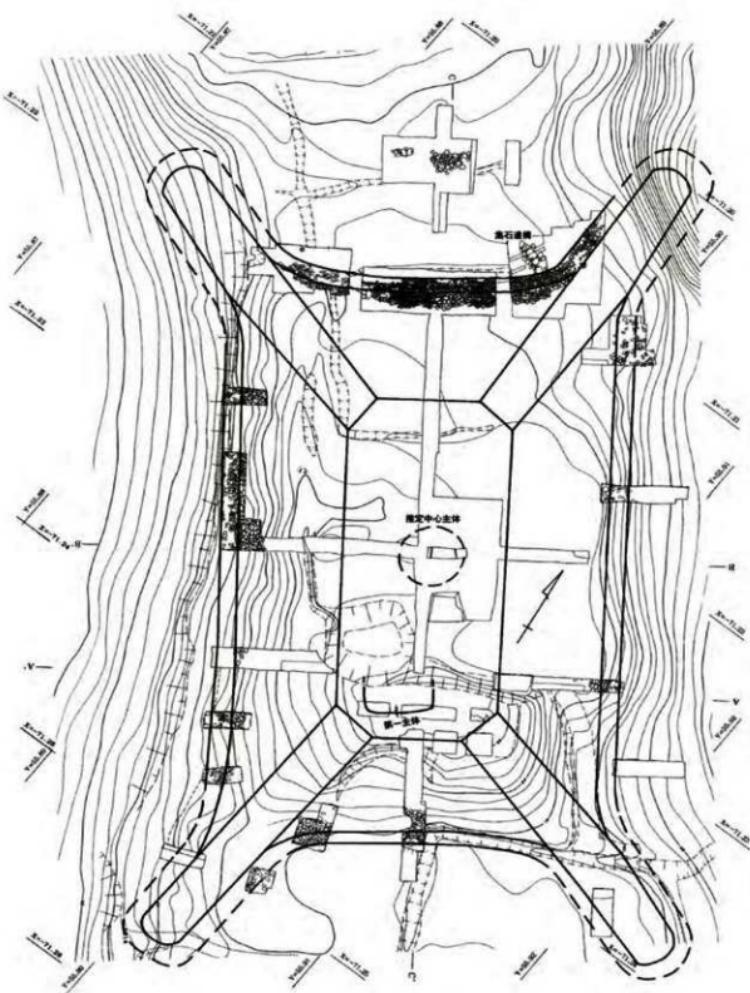


図1 2006復元案 (1/300, 「西谷塚墓群」2006から転載, 一部改変)

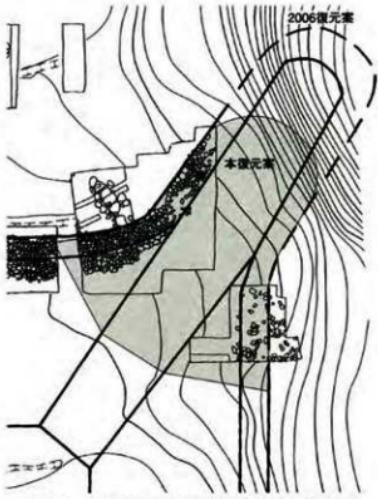


図2 2号墓北東突出部の復元状況 (1/200)

高さである。残丘部のピークは標高43.47mであり、また、この残丘の断面で確認された埋葬施設である第1主体の墓坑底の標高が41.76mであることから、その深さは約1.7mである。3号墓の第1主体の墓坑の深さが墳頂平坦面から約1.4mと推定されることを勘案すると、残丘部のピークは2号墓築造時の墳頂部の高さとあまり変わらないと考えられる。

よって、今回の整備復元においては、築造当時の2号墓の墳頂部の標高を43.5mと推定した。

また、墳裾外縁の標高は北側39.7m、南側40.4m、東側39.3m、西側39.8mをはかることから、墳丘の高さは3.1~4.2mとなる。

⑤墳丘斜面の斜度

墳丘斜面の斜度については、発掘調査で作成された各トレンチの断面図を基に検討を行った。

その結果、2号墓方形部における各斜面の斜度は、遺存状態が悪く検討が困難であった東側を除き、北側28~38度、南側28~37度、西側33度前後と推定した。

墳丘斜面の斜度は墳頂平坦部の規模や形状に関係することから、最終的にはこれらも勘案して、北側33度、南側34度、東側37度、西側33度とした。

とした。

⑥墳頂平坦部の規模

2006復元案では墳頂平坦部は東西9.5m、南北21mの規模で復元されている。2号墓の墳丘規模からすると、3号墓や9号墓との比較においてやや狭い印象を受ける。

よって今回の整備復元においては、想定される墳丘斜面の斜度の許す範囲でこれを若干緩和する事とし、東西11m、南北23.5mの規模として復元した。

⑦墳丘の貼石

発掘調査で確認された貼石の大きさは10~40cm程度のものが使われ、各場所でバラツキがある。しかし、傾向として裾部付近では上方と比較して大きな石が使われているようである。この傾向は作業をする上でも合理的であることから、今回の復元においてもこの傾向を再現することとした。

なお、本来西谷墳墓群の貼石は、神戸川や斐伊川の上流で採集できるものを使っているのであるが、今回の復元では同じものを入手することができなかった。よって、山口県産の石を取り寄せたが、2号墓で実際に貼られていたものを参考に20~40cmの白っぽい円礫または亜円礫で、かつ、石種は玄武岩、流紋岩、安山岩など火山岩を指定した。

最終的に2号墓の貼石は施工面積865m²、約25,000個に及んだ。

⑧集石遺構

2号墓の北側では墳丘外縁にはば接する位置で集石遺構が見つかっている。下部に掘り込みはなく出土物もないため、遺構の性格は不明である。しかし、2号墓に伴う遺構と考えられていることから、今回は併せて復元することとした。

⑨埋葬施設

2号墓では少なくとも二つの埋葬施設があったと考えられている。ひとつは南の残丘断面で

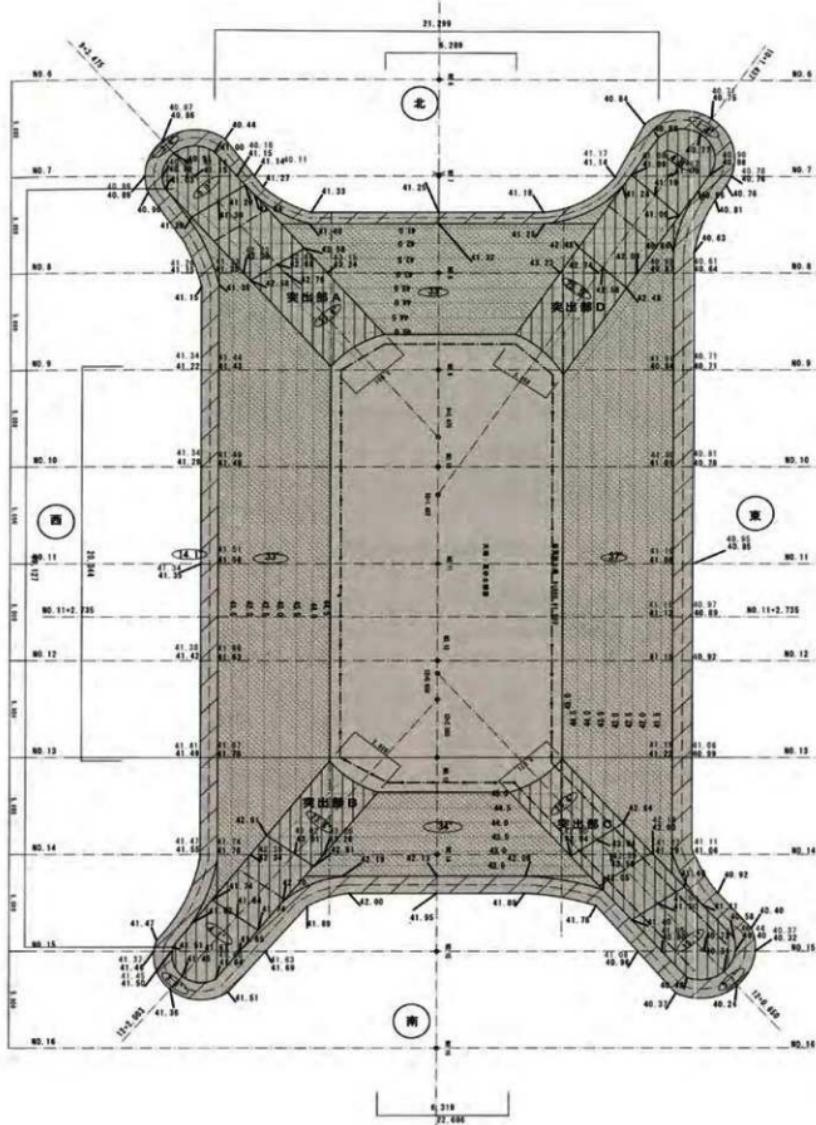
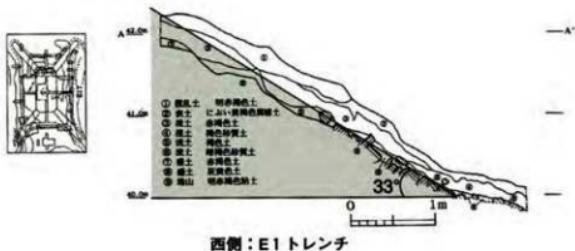
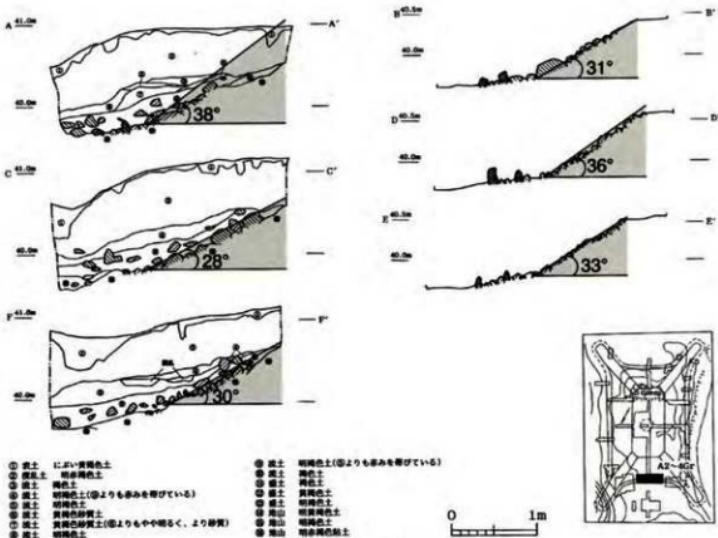


図3 2号墓埴丘整備復元平面図(1/250)



西側:E1 トレンチ



北側：A2～A4 グリッド

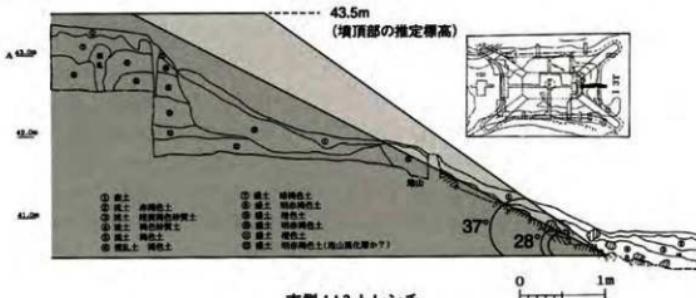


図4 2号墓埴丘断面図の斜度 (1/60、「西谷塙墓群」2006撮影図を基に作成)

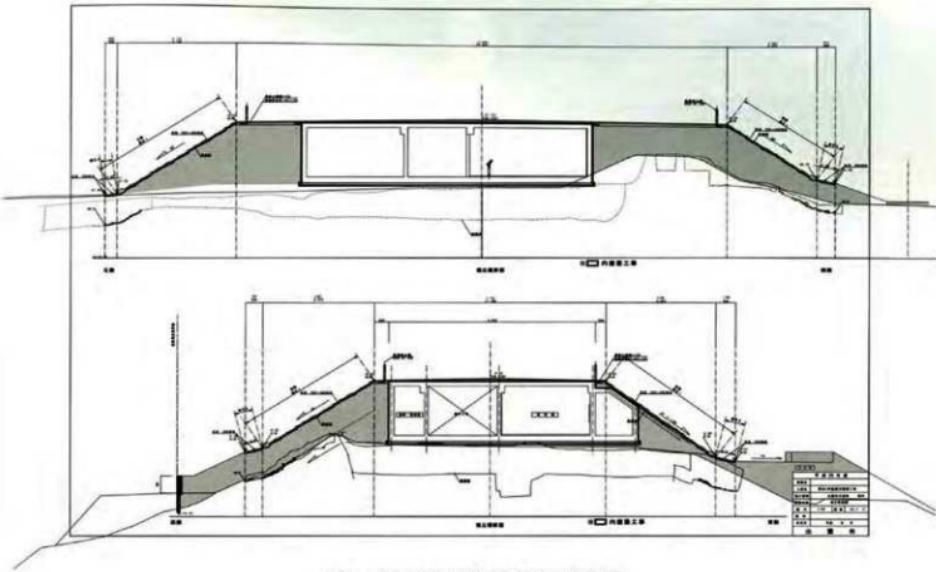


図5 2号墓整備復元縦横断面図 (1/250)

確認された第1主体、もうひとつは墳丘中央で水銀朱やガラス腕輪のほか、まとまった数の土器片が出土したことからその存在が推定されている中心主体である。

今回の復元では、2号墓内部に設けた展示室でこれらの復元模型を設置することとした。

まず第1主体であるが、発掘調査で確認された土層断面を等倍模型で復元し展示することとした。この模型の作成にあたっては発掘調査で実測された土層断面図を基に、FRP素材のパネルに土色を彩色して仕上げた。彩色にあたっては見学者に分かりやすくするために、実際の色よりも強調した。また、展示室外のコンクリート壁にも墳丘土層の継ぎを描きパネルの土層表現と連続させることで、14mに及び土層断面を示すことができた。

なお、実際の土層面は土層パネルの2.5m奥で、1m低い位置にある。

一方、中心主体は完全に破壊されていたため、埋葬主体があったと想定される位置に3号墓第

1主体の発掘状況を模型で再現し、そこにミラービジョンによって木棺に納められた埋葬人物像が次第に浮かびあがる展示装置を設置することとした。

この際、主体部の配置については墳丘の長軸に対して直交配置とした³が、頭位を西にした理由については、見学者にとって副葬品が手前に配されて見やすいという理由からであり、特に根拠があるものではない。

⑩墳丘の保護

今回の復元整備にあたっては遺構の保護が大前提である。当然、残存する遺構を毀損してはいけないので、実施設計は施工に際して遺構を傷つけないものとする必要があった。

このため、墳丘が削り取られた場所に展示室を設け、残丘とともに全体を盛土で覆って施工することで、墳丘の保護と復元を両立させる設計とした。よって整備後の2号墓は、全体が本来の標高より約1.5m高い位置での復元となっている。

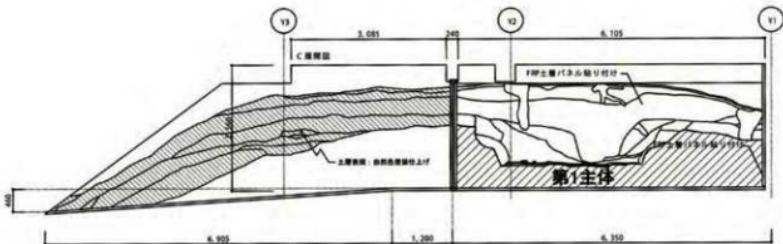


図6 2号墓第1主体土層断面パネル立図面 (1/100)

4. 2号墓復元と周辺工事の実施

2号墓の復元工事施工にあたっては周辺の整備工事と併せて実施したので、これについて述べたい。

2号墓本体と周辺の整備を目的とした工事は、西谷2号墓復元整備工事ほか3工事で行った。

先にも述べたように2号墓の整備は、内部に展示室を設けて墳丘全体を復元する内容となっていたため、工事を土木工事、建築工事、電気工事、展示工事に分けて実施する必要があった。

よって、それぞれ西谷2号墓復元整備工事、西谷2号墓建築工事、西谷2号墓電気設備工事、西谷2号墓展示工事⁴として発注した。

なお、これら一連の整備工事は、2009年（平成21）10月10日の西谷2号墓復元整備工事の着手をもって始まり、2010年（平成22年）3月26日の西谷2号墓展示工事の完了をもって終了した。

西谷2号墓復元整備工事では、2号墓の墳丘復元と周辺整備を行った。

墳丘復元は、墳丘が削平された箇所に建築工事で展示室となるコンクリートの軸体を建設した後に本格的に進めた。

まず、2号墓の残丘とコンクリート軸体を覆うように盛土を行った。そして、本来の墳丘の形状に整形しつつ、順次貼石を施していく。

周辺整備では排水溝、休養施設、園路広場、学習施設などを設置した。また、墳丘の西側に

シラカシ、アラカシ、ウバメガシを植栽したほか、園路沿いには張芝を施した。

排水溝については、2号墓を取り囲むようにU字溝を設置する予定であったが、地山掘削を最小限に留めるべく、西側と北側の一部で設置を見送った。

休養施設としては、2号墓東に造成した187m²の広場に、木製ベンチを4基設置し、学習施設としては、墳丘東に解説板が取り付けられるように、コンクリート基礎を埋設した。

また、3号墓まで取り付けられている既設の園路をこの整備で1号墓まで延長した。この際、展示室にアプローチする箇所は、車椅子に対応させるためスロープとした。また、2号墓東の広場と既設の園路とを接続させるため、階段園路を取り付けた。

西谷2号墓建築工事では、鉄筋コンクリート造平屋建て、建築面積134.3m²、延床面積126.0m²の展示室を建築した。

内部には見学室85.0m²、模型展示室10.5m²、機械室30.5m²を設けた。出入口は東側の2所で、北寄りは階段、南寄りはスロープとした。

また、壁と天井についてはコンクリート打放しとし、見学室の床については園路と同じ真砂土舗装で仕上げた。

西谷2号墓電気設備工事では、2号墓見学室内の照明器具の取り付けや、電気ケーブルの設置などを行った。

特に、見学室内に監視モニターの取り付けを行ったことから、このケーブルを引くため、既



整備前の2号墓



填丘盛土



建築工事



填丘貼石

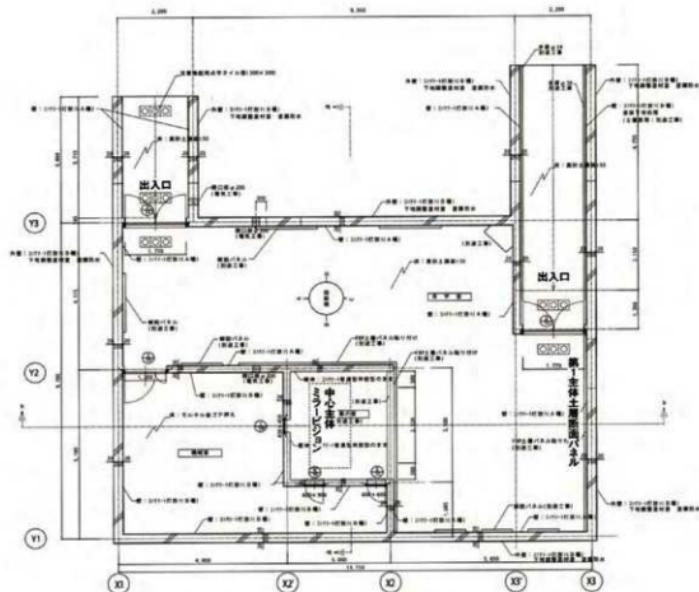


図7 2号墓展示室平面図 (1/150)

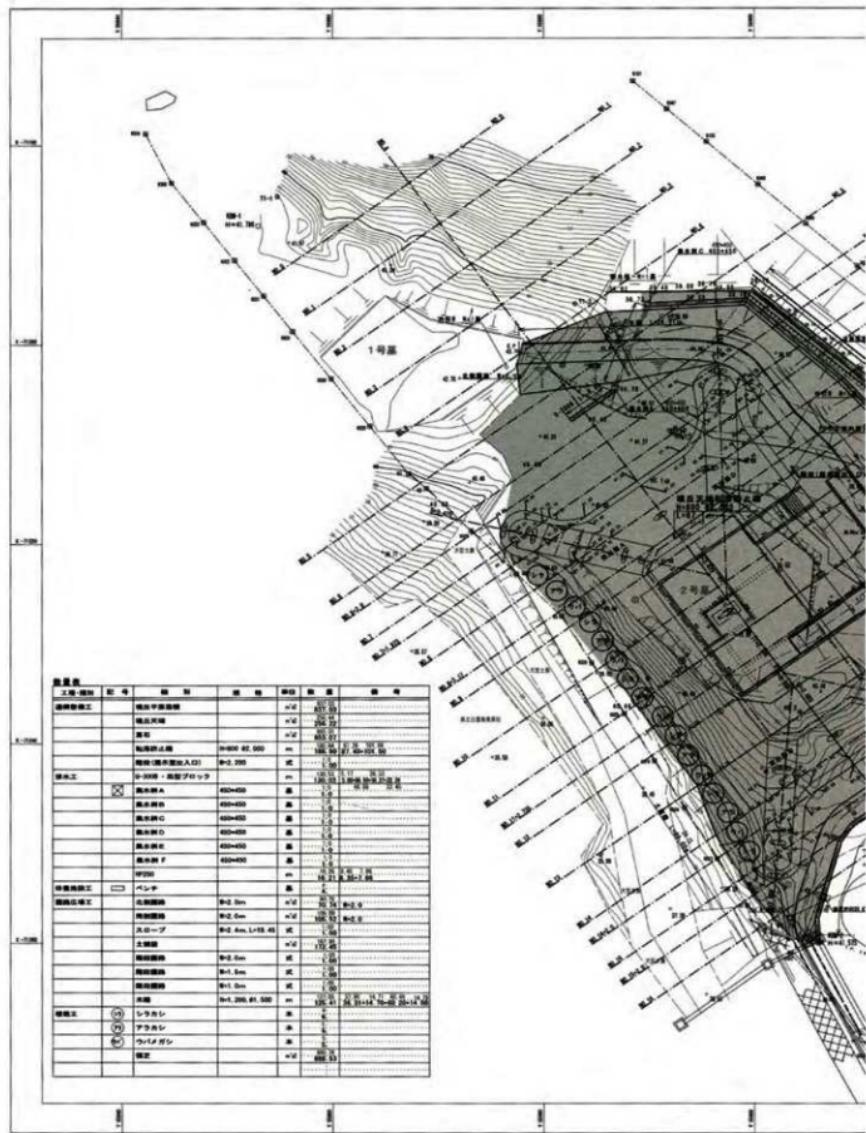
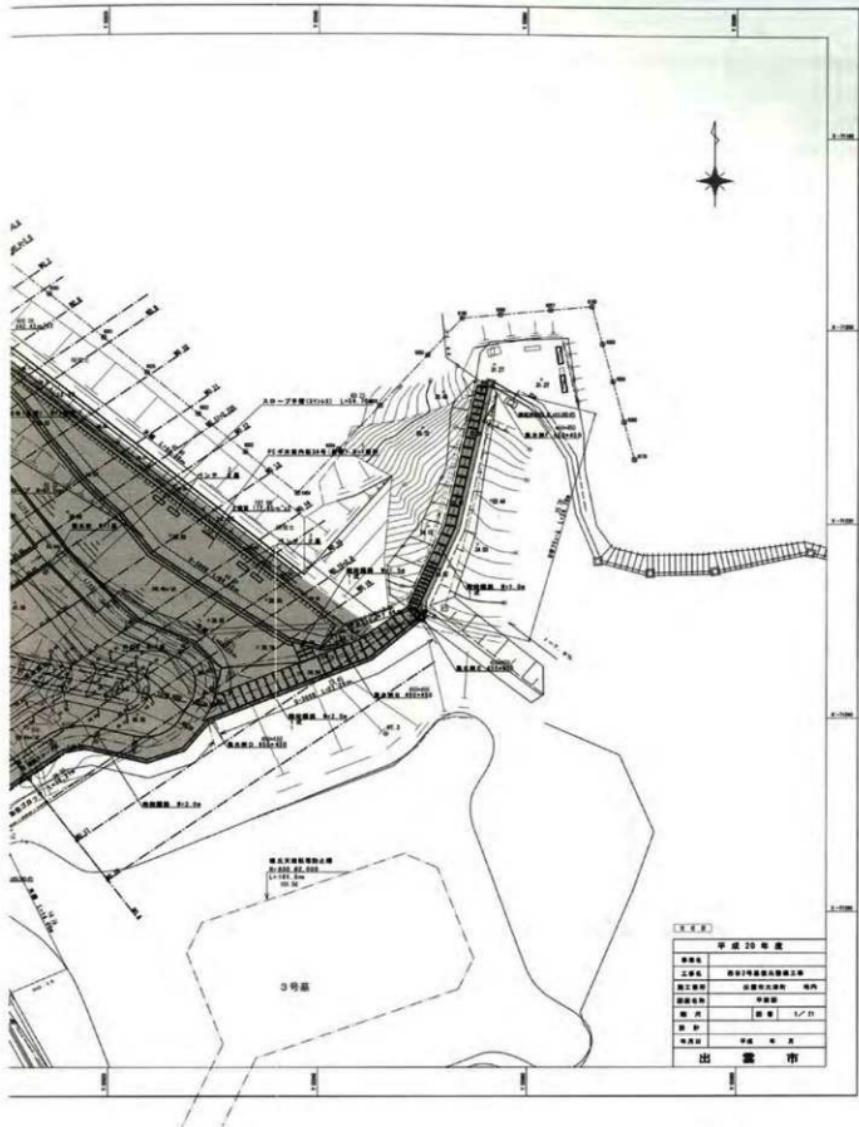


図8 2号墓復元・周辺整備平面図 (1/500)



西谷 2号墓の復元整備 (三原一将)

設園路沿いの240mにわたり、電気ケーブルの埋設を行った。この際、深さ30cm、幅30cmの掘削を行ったが、公園造成土の掘削にとどまり、地山掘削には至らなかった。

西谷2号墓展示工事では、2号墓内部の展示を行った。工事の内容は、先の「3. 墳丘の復元」

⑨埋葬施設で述べた土層断面パネル、発掘状況模型、埋葬人物模型のほか、解説グラフィック、ハンズオン装置の製作・設置を行った。

解説グラフィックは計7枚設置した。これらは土層断面パネルや埋葬人物模型の解説パネルのほか、2号墓と3号墓の発掘状況紹介パネル、西谷墳墓群の歴史を解説する年表などの内容としている。

ハンズオンは見学室の南東隅に取り付けた。子どもたちの興味を引くように、ハンドルを回すと電動で8枚の解説パネルが順次スライドして表示される仕掛けとした。

解説テーマは「西谷の丘」いま・むかし」とし、西谷墳墓群が築造された丘陵である「西谷の丘」とその周辺の歴史について、分かりやすく学べる内容とした。

註

1 実施設計は株式会社空間文化開発機構（大阪市）に委託した。

2 復元整備工事は出雲土建株式会社（出雲市）に発注した。

3 西谷3号墓の埋葬主体の配置状況及び弥生時代後

5.おわりに

以上、2号墓の復元整備について述べたのであるが、整備復元図の作成では委員会の委員長であった島根大学名誉教授の渡辺貞幸氏にご教示を頂き、当時出雲市文化財課内あった出雲弥生博物館創設準備室（花谷・清水・須賀・高橋・三原）でも検討を重ねて進めたことを申し添えておく。

また、委員会の委員の方々、指導機関の文化庁、島根県教育庁文化財課にご理解・ご了承を頂いたことで、墳丘内部に展示室を設けて、全体を盛土で覆い築造当時の2号墓を復元するというユニークで思い切った整備が行えた。

このおかげで墳丘保護という目的を達成しつつも見学者の关心を引く2号墓が再生でき、このことが史跡公園でも最も奥まった場所にある2号墓への誘客に繋がっており、ありがたい限りである。整備に関わった者として、一人でも多くの方に現場に足を運んで頂き、2号墓の壮大な姿を体感して頂ければ幸いである。

期後業～末にかけては墳丘長軸に直交して埋葬施設を配置する例が主流とする研究成果（池澤2007）を参考にした。

* 展示工事は株式会社丹青社（東京都）に発注した。

参考文献

- 池澤俊一 2007「山陰における方形区画墓の埋葬論理と集団関係」「四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究」
島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター
坂本豊治ほか 2006「西谷墳墓群－平成14年～16年度発掘調査報告書－」出雲市教育委員会
坂本豊治 2011「山陰における弥生後期の墓制－特に四隅突出型墳丘墓を中心に－」「弥生墓が語る吉備」
考古学研究会岡山例会第16回シンポジウム資料、考古学研究会
西尾克己ほか 1980「古代の出雲を考える2 西谷墳墓群」出雲考古学研究会
藤永照隆 2000「西谷墳墓群－平成10年度発掘調査報告書－」出雲市教育委員会
三原一将ほか 2011「出雲市の文化財報告19 史跡西谷墳墓群整備事業報告書」出雲市ほか
渡辺貞幸ほか 1992「西谷墳墓群の調査（I）」「山陰地方における弥生墳丘墓の研究」島根大学考古学研究室

神戸川流域における暗文土師器

—矢野遺跡の事例を中心に—

高橋 周

1.はじめに

出雲弥生の森博物館では、2011年3月26日から5月16日にかけて、2011年春季企画展として「東西南北二五〇〇年の交流—矢野遺跡の調査から—」と題する展覧会を開催した。矢野遺跡は出雲平野のはば中央、出雲市矢野町に広がる遺跡である。1953年以来、9次にわたる発掘調査が行われた。2010年には期間8年間に及ぶ第9次調査の報告書(坂本・原2010)が刊行され、本企画展は矢野遺跡の調査の総括的な位置付けをもつものであった。紙幅の都合上、矢野遺跡の詳細は既刊の報告書を参照されたい。本稿に係る古代の遺構については、複数の掘立柱建物・土坑・井戸が確認され、「社」「社司」などの墨書き器が出土することから、付近に『出雲国風土記』所載の「八野社」の存在が推定される。また、多数の転用硯、石製巡方などが出土し、公的施設の存在も窺わせる。

本企画展の開催に際して、報告書非掲載資料を含む出土資料の再検討を行った。その中で、第9次調査の資料に7~8世紀に属する赤色塗彩されない暗文をもつ土師器(以下、「暗文土師器」と呼ぶ)が多数含まれていることを確認した。これらは、いわゆる「畿内産(系)土師器」と称されるものである。本稿においては、矢野遺跡(第9次調査)で確認した「暗文土師器」について検討するとともに、神戸川流域における「暗文土師器」の事例と合わせて考察したい。

2.矢野遺跡出土の暗文土師器について

① A群土器<杯A・杯C・皿B>

ここでA群とするのは、精緻な胎土で、その色調が橙色(Hue 5 YR6/6, 7.5YR6/6)あるいは明赤褐色(5YR5/6)などを呈する「暗文土



図1 矢野遺跡調査位置と第9次調査の地区名

師器」である。これらは、宮都周辺で出土する「暗文土師器」とその色調や調整が類似し、同地域から搬入された「畿内産土師器」に相当するとみられる一群である。個体数は少なくとも20点を数え、島根県内で同様の土師器が出土する場合、一つの遺跡につき1~2点が多く、異例とも言える数である。

A群の土師器が出土した調査区は、現在の八野神社の東南に位置するB区西半部に集中する。後述するB・C群の土師器も同様の分布を示しており、B区にこれらの土師器に関連する施設の存在が想定される。矢野遺跡における「暗文土師器」のほとんどが包含層からの出土で、遺構に係る具体的な検討は困難である¹。ただし、B区には古代以降と推定される建物跡に囲まれた空隙地が認められ、暗文土師器の多くがその周辺で見つかることは注目される。

図2に示したのが、A群の土師器である²。このうち、7~12が杯Aである。口縁端部を肥厚させ玉縁状となるもの(8·11·12)と内傾するもの(7·9·10)がある。調整は底部外面を

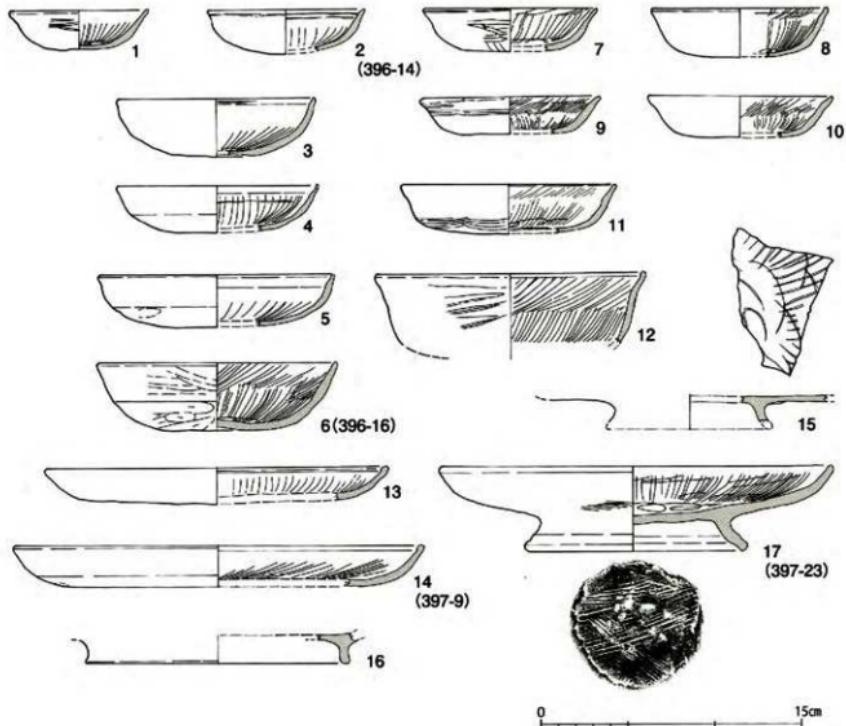


図2 A群土器 (1:3 カッコ内は報告掲図番号)

削って口縁部外面を磨く b1 手法 (7・8), 底部外面を不調整で残し口縁部外面を磨く a1 手法 (9~12) がみられる。内面の暗文は 7~12 とともに放射二段暗文をもち, 7・8・11には螺旋暗文も認められる。また, 1~6が杯Cである。口縁端部は内傾するもの(1・2)と内側へ軽く巻き込むもの(3~6)がある。調整は口径が11.5cm以下の1~4がa1手法もしくは底部外面を不調整でミガキが行われないa0手法で、口径が13cmを測る5・6はb1手法である。内面の暗文は1~5は放射一段暗文をもち, 6は放射二段暗文と螺旋暗文が認められる。また, 13・14は皿Aである。いずれも口縁端部は肥厚させ玉縁状にする。調整はともにa1手法で放射一段暗文をもつ。13・14の出土地点は異なるが、色調がともに明赤褐色で胎土も

よく似る。また, 15~17は皿Bもしくは杯Bである。15は高台の破片で、内面に放射暗文、連弧暗文、螺旋暗文が認められる。16も高台の破片で、小片のため暗文は認められないが、色調が橙色~明赤褐色を呈し精緻な胎土であることからA群に含めた。15・16は皿B・杯Bの一部であろう。17は皿Bである。口縁端部をやや肥厚させる。調整はb1手法で、底部外面には高台貼付時の際の目安としてつけられたハケ目が残る³。高台は外側にふんばる形状を呈し、飛鳥Ⅲ~Ⅳ期に見られるものである。内面には放射二段暗文に螺旋暗文を加える。色調は橙色(2.5YR6/8)。なお、図4は鹿歳山遺跡(出雲市大社町杵築南)出土の土師器杯Aである。既報告資料(石原ほか2005)であるが、企画展で「畿内産土師器」の一例として展示、再実測

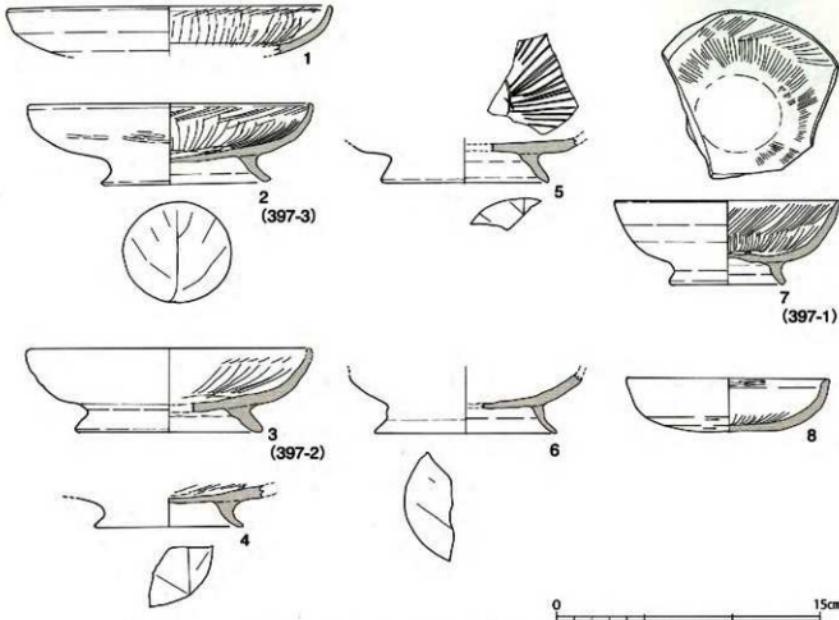


図3 B群土器 (1:3 カッコ内は報告番号)

を行った。口縁端部をやや肥厚させ、調整はb1手法である。内面の暗文は、放射二段暗文と螺旋暗文が認められる。底部外面に黒斑をもつ。

A群土器の年代は、その器形から概ね飛鳥IV～平城I期(680～710年代)におさまるものと考えられる。

② B群土器<杯B・杯C>

ここでB群とするのは、精緻な胎土に長石・石英及び赤色粒子などが少し含まれ、その色調

は浅黄橙色(Hue7.5YR8/4-6)、にぶい橙色(7.5YR7/4)を呈する「暗文土師器」である。B群の土師器出土の調査区は、A群と同様に現在の八野神社東南のB区西半部に集中する。

図3に示したのが、B群の土師器である。口縁端部を肥厚させ玉縁状にするもの(1・2)と丸くおさめるもの(7)がある。1～7はいずれも杯Bとみられるが、その高台は内面に稜をもち外側にふんばる特徴をもつ。調整は口縁部を中心にミガキが施される。2～6の高台内には葉脈の痕跡が残り、杯部の成形について木ノ葉成形の手法がとられた可能性が高い⁴。高台は貼り付けであるが、その中心軸は杯部と一致せず、回転台成形ではないことを窺わせる。内面の暗文は、1～3・7に放射二段暗文が認められ、2・3・7には螺旋暗文がある。4・



図4 鷹藏山遺跡出土の縦内産土師器 (1:3)

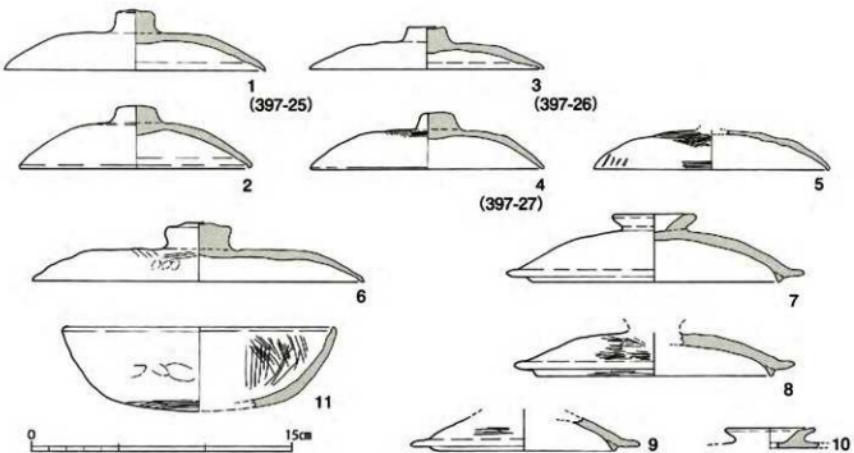


図5 C群土器 (1:3 カッコ内は報告採図番号)

5は高台のみであるが放射暗文がつき、5には螺旋暗文がある。6は風化が激しく暗文は確認できない。8は胎土の特徴からB群とした。外面の調整は風化のため不明であるが、底部は横方向のケズリ。口縁部内側にミガキを施し、内部に放射状暗文がつく。

B群の土師器にはA群とともに同グリッド・同層位で出土したものがあり、何らかの関係が想定される。その形状から「畿内産土師器」とはできないが、特に高台部の外側にふんばる形は、飛鳥IV期に相当する奈良県橿原市・桧前上山遺跡第2次第5トレンチ包含層の事例(林部1985)にあるように当該期の特徴の一つである。近県の事例としては、広島県海田町・畠観音免1号墳出土の杯Bがある(安間1992)⁵。B群の特徴として、口縁部が玉縁状であることや木の葉成形が認められることを考えると、B群は畿内の技法的影響下にあると言える。その時期は、A群と近い時期に推定することができよう。

③ C群土器<蓋・杯C>

C群は蓋を中心とする土器群である。胎土は精緻で1mm以下の砂粒をわずかに含み、一部に赤色粒子が見られる。その色調は、図5-1

～6・11が淡橙色(Hue 5 YR8/4)、7～10が橙色(5 YR7/4)を呈する。蓋の形状は口縁部が細まるもの(1～6)と「かえり」をもつもの(7～9)に分かれ、それぞれに対応する頂部がある。2～5・8はいずれも口径13.4cmで、一定の規格性が窺える。1～6はユビオサエによる成形痕が顕著で、口縁部を成形した後につまみを付け、ナデによる調整をする。4～6にはつまみ周辺を中心に直交するミガキが見られる。内面はナデを施し、暗文は確認できない。7～9は外面頂部から口縁部の「かえり」の内側にかけて、ミガキが施される。内面はナデ。7は、つまみと口縁部は別破片であったが、色調・胎土・調整が似ることから、同一個体と捉えた。「かえり」をもつ土師器蓋は島根県内に類例を見ることはできない。また、11は胎土・色調がC群の蓋とよく似る。底部を削り、体部はユビオサエもしくはナデによる調整。内面には粗雑な放射状暗文がつく。

C群土器についても、手づくねによる成形とともに蓋のミガキ調整など、畿内の技法的影響を見ることができる。また、「かえり」をもつ土師器蓋は、つまみの形状などは朝鮮半島の影響を受けた可能性がある。C群土器もA・B群と同様な出土状況を示しており、飛鳥IV～平城I

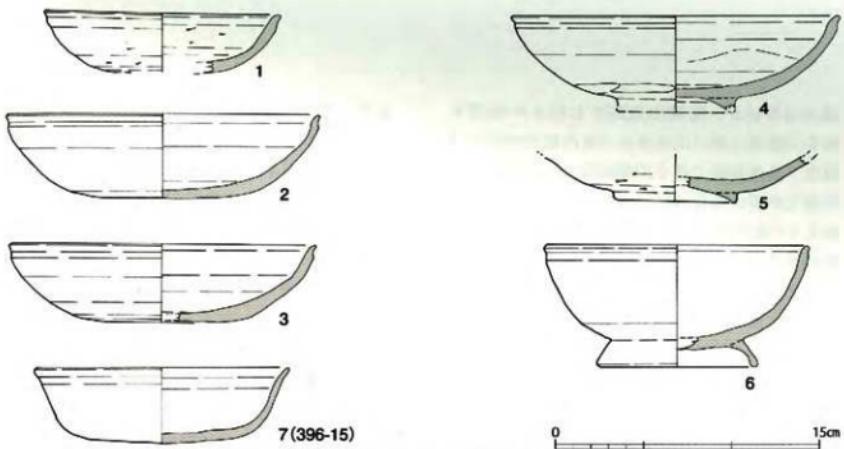


図6 D群土器 (1:3 カッコ内は報告掲図番号)

期に相当する時期が考えられる。

④ D群土器<杯A・杯B・杯C>

D群土器とするのは、1~3mm程度の長石・石英を多く含み、浅黄橙色(7.5YR8/4)を中心とした色調をもつ土器群である。長石などを多く含むことから、それらの剥落が顕著である。また、赤色粒子も少し含む。D群の土師器に暗文は認められないが、その出土地点はA~C群と同様にB区で、グリッド・層位も同じである。したがって、本稿では「暗文土師器」に関連する一群としてD群を位置づける。

図6に示したのがD群の土師器である。特に1~5は形状の特徴が類似しており、同一の手法によると考えられる。1は13.4cmと小ぶりで、2~4は17.8cmと二分することができる。その形状は、口縁部を内傾させ、外面に浅い凹線がめぐる。調整は底部周辺がケズリ後ナデ、そのほかはナデによる。外面と内面の一部にはミガキが見られる。ケズリは横方向に手持ちによるもの。4・5は高台のつくもので、高台貼り付け後にナデを施す。6は風化が激しく、外面の調整は不明であるが、口縁部外面にナデによる浅い凹線がめぐる。7も風化のため外面の調整は不明であるが、口縁部内側の一部にミ

ガキがみられる。

D群土器もA~C群と同様のグリッド・層位で出土しており、同時期の所産である可能性が高い。後述するが、鹿巣山遺跡や古志本郷遺跡でも類似の土器が出土している。

3.矢野遺跡と神戸川流域の遺跡の暗文土師器

前節まで矢野遺跡出土の「暗文土師器」を分類したが、このような赤色塗彩されない「暗文土師器」の事例は、神戸川流域の遺跡においても確認される。本節では、矢野遺跡での分類に鑑み、神戸川流域の遺跡出土の「暗文土師器」について触れたい。

A群土器は、緻密で橙色あるいは明赤褐色の胎土をもつ、いわゆる「畿内産土師器」に相当する。神戸川流域の遺跡からの出土例については、奈良文化財研究所の集成がある(奈文研2005)。それによると、上流域では板屋Ⅲ遺跡(破片)・森遺跡(杯A)、下流域では上塙治横穴墓群14支群(杯C)・古志本郷遺跡E区(杯A?)の事例がある⁶。その集成にはないが、古志本郷遺跡K区SE01の杯C(守岡ほか2003(51図-11))も同例に入るとみられる⁷。神戸川流

域ではないが、鹿藏山遺跡でも杯Aが確認される（図4）。神戸川流域の「畿内産土師器」は官衙・集落遺跡に多く、島根県内では墳墓からの出土が多いことに比して特徴的である。遺跡あたりの出土点数でみると、神戸川流域を含め県内の遺跡は1～2点が大半で、矢野遺跡では20点と多い。

また、B～D群に相当する「暗文土師器」も神戸川流域の遺跡において認められる。特にB群の特徴である底部外面に木葉痕が認められる事例が複数の遺跡で確認される。その一つが、三田谷I遺跡SD06出土の杯A（熱田ほか2000〈64図-12〉）である。暗文は認められないが、底部外面に木葉痕が確認される。胎土は浅黄橙色で、長石・石英及び赤色粒子を少し含み、底部には剥落がみられる。矢野遺跡のB群土器に近い特徴をもつ。また、上流域の神原II遺跡1区包含層出土の杯A（鳥谷ほか2000〈26図-8〉）の底部外面にも明瞭な木葉痕がある。報文は内面の暗文を放射二段として図示するが、実見したところ、見込み面には螺旋状暗文も確認される。色調は橙色あるいは明赤褐色で、外面には黒斑があり、「畿内産土師器」に類する可能性もある。また、神原I遺跡A区出土の杯B（鳥谷ほか2000〈31図-6〉）の高台内にも木葉痕とみられる凹凸が確認される。色調は橙色を呈し、報文は赤色塗彩とするが、胎土の発色によるものとみられる。胎土の色調・焼成とともに、矢野遺跡のB群土器と特に類似するものとして注目される。さらに、門遺跡SI08出土の土師器（内田ほか1996〈19図-25〉）にも木葉痕が認められる。

矢野遺跡をはじめ神戸川流域の複数の遺跡において、土師器底面の木葉痕が確認されることには注目される。管見の限りにおいて、木ノ葉成形技法の展開を専論した論考ではなく、全国的な視点からの検討は十分に行われていないのが現状である。神戸川流域の木葉痕をもつ土師器は

色調・胎土から在地産もしくは畿内周縁部での生産の可能性が高く、複数遺跡での分布確認は在地における木ノ葉成形技法の展開の可能性を高めるものである。本稿では神戸川流域の事例のみを検討したが、斐伊川流域や出雲東部における事例も精査し、出雲国における木ノ葉成形技法の展開を考えたい。この点については今後の課題である。

また、矢野遺跡B群土器と同様に、浅黄橙色やぶい橙色を呈する暗文土師器は、古志本郷遺跡・三田谷I遺跡などにおいても確認される。紙幅の都合上、その個別事例の検討は提示できないが、矢野遺跡における暗文土師器の分類は神戸川流域に展開できる可能性が高い。

また、図5-1～5のD群土器と類似するのが、古志本郷遺跡F区包含層出土の土師器（松尾ほか2003〈11図-21〉）である。内面に放射一段暗文がみられ、報文では外側の調整を回転ヘラケズリとするが、実見のところ、手持ちによるケズリにミガキを施したものと確認した。その形状は矢野遺跡の事例と少し異なるが、口縁部に浅い凹線がめぐる点や底部をヘラ切り後に高台を付けナデによる調整をする点など、類似の事例としてあげておく。また、鹿藏山遺跡包含層出土の土師器（石原ほか2005〈48図-18〉）も同例と考えられる。

以上のように、神戸川流域の遺跡において、A群の「畿内産土師器」をはじめ、B群における木葉痕や同様の色調・胎土をもつ土師器、D群と同様の調整を施す土師器など、矢野遺跡にみえる土師器と共通した要素が確認されることには注目される。その傾向の起因・背景については、隣接の諸地域の様相をふまえた上で、今後検討すべき課題である。

4.おわりに

最後に、矢野遺跡の「暗文土師器」の年代観

についてまとめておきたい。矢野遺跡の「暗文土師器」はほとんどが包含層からの出土であり、厳密な意味での一括性のあるものとはできない。ただし、出土の範囲や層位には一定のまとまりが認められ、同時期の所産のものである可能性が高い。それらの年代観を推定するにあたり、参考となるのはA群土器で、その器形から概ね飛鳥IV～平城I期（680～710年代）におさまるものと考えられる。したがって、B～D群土器についても、その年代に准じるとみられる。

B～D群土器の年代観をこのように捉えることができるならば、注目されるのは岡田編年・出雲II期の須恵器（岡田・土器検討グループ2010、以下、型式分類もこれによる）との関係である。例えば、C群土器の輪状つまみでかえりをもつ蓋（図4-7～9）は出雲II期・蓋I類に相当する。同様に、B群土器の杯B（図3-1～6）は、木葉痕などの成形・調整においては畿内の技法の影響下にあるが、口縁部が直立気味となることやハ字状の高台など、その形状は出雲II期・杯IIA類に近い。また、D群土器の杯C（図6-1～3）は、口縁部外面に浅い凹線をもつなど、その形状は出雲II期・杯I類に似る。

ただし、C群土器の蓋のつまみは厚く外傾しており、輪状つまみの古い形態とされる松江市・西宗寺古墳出土の杯蓋あるいはその形状の類似が指摘される韓国・慶州皇宮洞118-6遺跡や皇南洞376遺跡出土土器に近い（重見2008・川原2010）。また、D群土器についても、その形状は藤原京・大官大寺SK121下層出土土器のうち、ロクロ製土師器（西口・玉田2001〈図58-80・81〉）に近く⁸、単純に当該期の在地系須恵器の模倣とも言い切れない。

このように、矢野遺跡の「暗文土師器」の一部には出雲II期の須恵器の形状に似るものがある一方で、木葉痕や細かなミガキなどの成形・

調整については、出雲の同時期の土師器には見られない特徴をもつ。さらに、その形状には朝鮮半島の土器に近い特徴をもつものもあり、川原和人による出雲型須恵器と新羅土器の類似性の指摘（川原2010）とも関係して興味深い。「律令的土器様式」への変化が660年代の百濟遣民からの文化的影響にみる指摘（西1986）があるように、その影響を反映した可能性もある。それが、直接的なものか、間接的なものかは、木葉痕との関係もふまえて検討する必要がある。また、岡田編年（岡田・土器検討グループ2010）では出雲II期を飛鳥III期と対応させ、7世紀後葉に比定する。しかし、矢野遺跡では飛鳥IV～平城I期の「畿内産土師器」が出雲II期の須恵器と同層位から出土しており、矢野遺跡の「暗文土師器」の年代については同層位出土の須恵器の検討も含めて改めて考えなければならぬ。

以上、煩瑣な考察となった。矢野遺跡出土の「暗文土師器」については検討すべき多くの点を残すが、7～8世紀における出雲の土師器の型式成立を考える上で、重要な資料となることは違いない。今後は既に述べた課題を含め、赤彩暗文土師器との関係など、從来総体的に考察されることが少なかった出雲国における律令期の土師器について、考察を進めていきたい。

【補記】 本稿をまとめるにあたり、奈良文化財研究所・金田明大氏よりご教示を賜った。また、資料調査に際して、島根県埋蔵文化財調査センター・勝部智明氏のご協力を得た。記して、感謝申し上げる次第である。

註

¹ 包含層からの出土が多い様相は、赤彩土師器も同様である。出雲平野の他の遺跡でも、赤彩土師器は包含層からの出土が多く、その用途をめぐる検討も必要であろう。

² 図2-2・6・14・17をいずれも赤彩とするが、胎土の発色によるものである。

³ 金田明大氏のご教示による。

⁴ 線刻による「畿内産土師器」の模倣の可能性も考えたが、胎土の粒子・砂粒の動きを観察すると、線刻ではなく押圧による痕跡であることが分かる。

⁵ 同資料は海田ふるさと館に展示される。実見したところ、B群と色調が近く、芸備地方の土師器も含

めた検討の必要があるかもしれない。

⁶ 本稿においては、便宜的に神戸川が出雲平野に出る出雲市朝山町周辺を境として、上流・下流に分ける。

⁷ 報文中の観察表には、「赤色顔料付着」との記載されるが、実見したところ認められなかった。また、調整も「回転ナデ」とするが、口縁部は「ナデ」、底部は未調整である。この事例のように、胎土による発色を「赤色塗彩」などとする事例が少なからず存在すると考える。

⁸ 口縁部を内傾させ平坦面をつくる点においては、韓国・慶州皇宮洞118-6遺跡の2号基壇建築物跡出土の土器にみられる特徴（川原2010）に近い。

参考文献

- 熱田貴保ほか 2000『三田谷I遺跡 Vol.2』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書4, 建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会。
- 安間拓巳 1992「広島県出土の暗文土師器」「芸備」30, 41~60頁。
- 石原 晃はか 2005『鹿島山遺跡』大社町立大社小学校改築事業に伴う発掘調査報告書, 大社町教育委員会。
- 内田律雄ほか 1996『門遺跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書3, 岩手県教育委員会。
- 岡田裕之・土器検討グループ2010『出雲地域における古代須恵器の編年』『出雲国の形成と国府成立の研究』島根県古代文化センター, 13~43頁。
- 川原和人 2010『出雲地方における律令時代の須恵器の特色とその背景』『出雲国の形成と国府成立の研究』島根県古代文化センター, 103~122頁。
- 坂本豊治・原 俊二 2010『矢野遺跡』新藤川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 岛根県出雲県整備事務所・出雲市教育委員会。
- 重見 泰 2004『7~8世紀を中心とする新羅土器の形式分類ー「新羅王京様式」構築に向けての基礎研究ー』『文化財学報』第22集, 奈良大学文学部文化財学科, 27~56頁。
- 重見 泰 2008『新羅土器形式分類の検討ー形式の出現とその背景ー』『考古学論叢』第31冊, 奈良県立橿原考古学研究所, 49~68頁。
- 鳥谷芳雄ほか 2000『神原I遺跡・神原II遺跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書8, 建設省中国地方建設局・島根県教育委員会。
- 奈良文化財研究所 2005『畿内産暗文土師器関連資料I -西日本編-』。
- 西 弘海 1986『土器様式の成立とその背景』。
- 西口壽生・玉田芳英 2001『大官大寺下層土坑の出土土器』『奈良文化財研究所紀要2001』独立行政法人奈良文化財研究所, 26~29頁。
- 林部 均 1985『桧前・上山遺跡』『奈良県遺跡調査概報(第2分冊)1984年度』奈良県立橿原考古学研究所, 419~432頁。
- 松尾充晶ほか 2003『古志本郷遺跡V 出雲国神門郡家間遺跡の調査』斐川放水路建設予定地内発掘調査報告書16, 国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会。
- 守岡利栄ほか 2003『古志本郷遺跡VI K区の調査』斐川放水路建設予定地内発掘調査報告書17, 国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会。

矢野遺跡出土の檜扇について 原 傑二

1.はじめに

出雲弥生の森博物館では、開館初年度の平成22年度末に、2011年春季企画展として、「東西南北二五〇〇年の交流－矢野遺跡の調査から－」と題した展覧会を開催した。

展覧会は、矢野遺跡の大規模調査の報告書が刊行され、調査が一区切りをしたことから、今までの調査成果をまとめ、矢野遺跡の弥生時代から近世・近代までを通じてとらえたものであった。

その中の、古代のコーナー（平安時代の「八野郷」）において、出土した檜扇を展示するとともに、復元模型を制作し展示了。

しかし、檜扇の写真を図録（原・高橋2011）には載せていないことや、調査報告書（原2010）でも、細かい点は記述していないことなどから、檜扇とその復元方法について、ここで改めて紹介することとする。

2. 檜扇について

檜扇は、桧や杉の薄板を数枚重ね合わせ、下端を一点で止めて、上端付近を糸で縫じ合わせたもので、扇形に開閉して、送風具として利用するものである。

島根県内の檜扇として有名なものは、松江市鹿島町の佐太神社が所蔵する平安時代の彩絵檜扇（国指定重要文化財）である。

また、身近な例としては、ひな祭りの、お雛様が手にしているのが檜扇であるが、意識して見ないとそうとは気付かないかもしれない。

出土檜扇の研究としては、近畿地方を中心とした古代の木製品を集成した町田章氏と上原真人氏の研究（町田・上原1985）や、古代都城を中心とした辻裕司氏の論考（辻1998）が知られている。

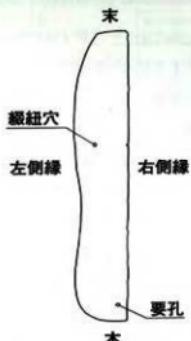


図1 檜扇部分名称図

ここでは、辻氏が扇具を团扇・檜扇・蝙蝠扇の3つに分類されていることから、その名称を用いることとする。

3. 出雲地方での出土状況

現在、出雲地方で出土した檜扇は、5遺跡6遺構である（表1）。

いずれも、完形で出土しておらず、要が外れて骨が1枚ずつ分かれた状態や、骨自体も折れて割れた状態で出土しているため、檜扇と識別すること事態も難しい場合があることから、気づかない例もあるものと思われる。

松江市では出雲国府跡1遺跡2例のみだが、出雲市では4遺跡4例の出土例が知られている。矢野遺跡のような檜扇と明らかに判明する例は、青木遺跡の1例のみである。

出土する遺構は、井戸・土坑で、それらの中に廃棄した状態で出土している。このため、檜扇が完全な状態では見つかっていない。また檜扇の年代も特定できかねる状態である。

4. 矢野遺跡出土の檜扇について

檜扇は完形で出土したわけではなく、骨の破片4片が出土したのみである。すべて、土坑SK2003から出土した。この土坑は、矢野神社東方およそ200mの地点に位置しており、平面形が梢円形である。断面形は2段掘り状の逆台形をなす。長径5.2m、短径3.6m、深さ1.0mである。

土塗埋土の中ほどから、須恵器（高台付皿）、土師器（擂鉢、杯、小皿、柱状高台杯）、漆器椀、木製品（薄板、下駄、しゃもじ状木製品、合子の蓋）などと共に出土した。須恵器は9世紀、土師器の小皿と柱状高台付杯は13世紀、土師質の擂鉢は13～14世紀である。

のことから檜扇の年代は、13～14世紀以降のものと考えられる。

檜扇の形態は、桧の薄板で、木取りは柾目取りである。骨が4片出土している（図2-1、写真1-2）。

もともと1枚の骨が、綴紐孔付近で上下に2つに割れている。完全に接合するわけではないが、割れ口の様子や、木目などから、ほぼ同一個体と思われことから、同形同大の2枚分の骨が出土していると考えた。

末は斜めに切り、本は丸くおさめる。右側縁は直線で、左側縁はS字状である。S字の上側の曲がりが大きくゆるやかで、下の曲がりが小さく急である。木肌は荒削のままであるが、図2-1の裏面と図2-2の表面は、滑らかに仕上げられている。

滑らかな面の本側には、それぞれ斜め方向の擦傷が残る（写真3）。その面を向い合うように重ね合わせると、傷の方向と傾きとが同一となることから、この傷は扇の開閉に伴う傷と推定され、この2枚の骨は親骨にあたると考える。

骨の制作方法は、成形された厚手の板を、木から刃物で薄く均一に削ぎ取りながら骨を製作

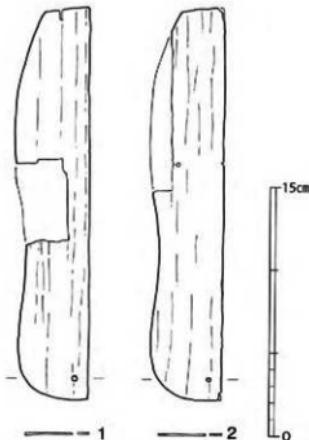


図2 矢野遺跡出土檜扇実測図（1:3）

すると言われていることから（国武ほか2010），骨2枚を上下に重ね合わせてみたが、微妙に一致せず接合はしなかった。

長さ23.5cm、最大幅4.0cm、厚みは不均一ではあるが約0.1cmである。綴紐孔は直径0.3cmで、骨の横の中心から上寄りで、左側縁から約1.5cm右側にあく。要孔は直径0.3cmで、末の右側縁寄りにあく。

5. 檜扇の復元について

実測図をもとに骨1枚分の形を復元し、これを厚紙に写して切り抜き、茶褐色で着色した。骨の重ね合わせは、重ねた上の骨を、下の骨の綴紐孔まで右側にずらしていく方法で、順次拡げていった。20枚の骨で、開いた角度が105度となった。

綴紐は開閉を考えず、骨が固定され展示に支障が無いような紐の通し方とした。

要孔には、紐を通し、重ね合わせた骨が固定するように、こげ茶色のビーズ丸玉を両側に取り付けた（写真4）。

表1 出雲地方出土の檜扇

所在地	遺跡名	遺構	種類	数量	法基〔〔〕は既存例〕	樹種	木取り	年代	掲載画面番号	文献
出雲市	矢野遺跡	B区 土坑S K2003	檜扇	2点	長さ [4.0] 0.1 [23.5] [4.0] 0.1	ヒノキ科アス ナロ属	柱目 不明	13世紀～14世紀以降	第226回18 第226回19	原2010
	三田谷I遺跡	谷部流路	蝙蝠扇	1点	[15.2] 0.1 ※1.6	不明	不明	8世紀中頃～9世紀後半	第129回14	鳥谷2000
	青木遺跡	I D区 土坑S X50	椿扇	1点	23.5 [2.0] 0.3	ヒノキ科	柱目	8世紀中頃～9世紀後半	第127回W081	今岡ほか2006
	里方本郷遺跡	15区 抵強区	蝙蝠扇	1点	[15.5] 2.2 0.1	不明	柱目	奈良・平安時代	第81回182	中川ほか2008
松江市	出雲国府跡	大倉原地区 4号井戸	蝙蝠扇	1点	[20.0] 1.2 0.4	不明	不明	11世紀後半～12世紀	第32回29	守岡2004
				3点	[16.9] 0.75 0.2 [16.0] 0.8 0.2 [15.3] 0.8 0.2				第32回30 第32回31 第32回32	
				6点	[9.8] 1.4 0.3 [3.6] 1.4 0.3 [14.5] 1.4 0.5 [6.9] 1.3 0.3 [9.1] 0.9 0.2 [8.3] [1.0] 0.3	不明	12世紀～13世紀	第228回1 第228回2 第228回3 第228回4 第228回5 第228回6	岡野ほか2009	
				6点	[9.8] 1.4 0.3 [3.6] 1.4 0.3 [14.5] 1.4 0.5 [6.9] 1.3 0.3 [9.1] 0.9 0.2 [8.3] [1.0] 0.3					
	紫田地区 12号井戸	蝙蝠扇	椿扇	1点	[20.0] 1.2 0.4			第228回1		
				3点	[16.9] 0.75 0.2 [16.0] 0.8 0.2 [15.3] 0.8 0.2			第228回2		
				6点	[9.8] 1.4 0.3 [3.6] 1.4 0.3 [14.5] 1.4 0.5 [6.9] 1.3 0.3 [9.1] 0.9 0.2 [8.3] [1.0] 0.3			第228回3		
				6点	[9.8] 1.4 0.3 [3.6] 1.4 0.3 [14.5] 1.4 0.5 [6.9] 1.3 0.3 [9.1] 0.9 0.2 [8.3] [1.0] 0.3			第228回4		
				6点	[9.8] 1.4 0.3 [3.6] 1.4 0.3 [14.5] 1.4 0.5 [6.9] 1.3 0.3 [9.1] 0.9 0.2 [8.3] [1.0] 0.3			第228回5		
				6点	[9.8] 1.4 0.3 [3.6] 1.4 0.3 [14.5] 1.4 0.5 [6.9] 1.3 0.3 [9.1] 0.9 0.2 [8.3] [1.0] 0.3			第228回6		

守岡2004・岡野2009をもとに作成 東 国面を計測 ※2 各4枚が要で止められた状態

6.まとめ

矢野遺跡出土の檜扇について、企画展で展示了したことから、今回改めて紹介する事とした。

出雲地方の檜扇は、蝙蝠扇がほとんどで、檜扇は青木遺跡出土例のみである。

また、矢野遺跡の檜扇は平面形が青木遺跡のように一般的な形ではなく、類例が無い形をしている。はたして檜扇として良いかどうか判断に困る点もあるが、形状からそのように考えてみた。この点については今後の類例の増加に期

待したい。

遺跡の立地条件にもよるが、檜扇は出雲地方のうち出雲市内から多く出土している。今回は、檜扇が出土した遺跡や遺構の評価には触れていないが、今後、検討を加え、檜扇が出土した意味を考えていく必要がある。

(付記)

復元品の制作は高橋周とともに検討を行った。

参考文献

- 今岡一三ほか 2006『青木遺跡II』(弥生～平安時代編 第3分冊(奈良・平安時代)』国道431号道路改築事業(東林木バイパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書III、鳥根県教育委員会。
- 国武貞克・藤井裕之・吉岡直人・浅野啓介 2010『檜扇の製作に関わる新知見』『奈良文化財研究所紀要2010』、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所。
- 辻 裕司 1998『古代都城出土の扇』『研究紀要 第4号』、財団法人京都市埋蔵文化財研究所。
- 鳥谷芳雄 2000『三田谷I遺跡(Vol.3)』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV、鳥根県教育委員会・建設省出雲工事事務所。
- 中川 寧ほか 2008『里方本郷遺跡・山持遺跡4(5区・7区)』国道431号道路改築事業(東林木バイパス)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6、鳥根県教育委員会。
- 原 俊二 2010『中世の遺構出土遺物』『矢野遺跡 遺構編(第1分冊)』出雲市の文化財報告10、鳥根県出雲県土整備事務所・出雲市教育委員会、278～289頁。
- 原 俊二・高橋 周 2011『春季企画展図録 東西南北二五〇〇年の交流－矢野遺跡の調査から－』、出雲弥生の森博物館。
- 町田 章・上原真人 1985『木器集成図録 近畿古代篇』、奈良国立文化財研究所。
- 間野大丞ほか 2009『史跡出雲国府跡6』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書19、鳥根県教育委員会。
- 守岡正司 2004『史跡出雲国府跡2』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書15、鳥根県教育委員会。



写真1 図2-1の表面



写真2 図2-2の表面



写真3 左は図2-2の表面 右は図2-1の裏面



写真4 復元模型

鷺浦遺跡出土の陶磁器

西尾克己

1.はじめに

所謂「鷺浦古墓」は、出雲市大社町鷺浦116番地にあり、鷺浦港近くの町並みに位置する。鷺浦は島根半島西端の漁村であるが、近世から近代にかけては西側に所在する宇龍港と共に、北前船の寄港地として繁栄していた。また、戦国時代の博多商人神屋寿祺が関わったとも言われる鷺浦銅山跡も近くに存在する。

この遺跡は1890年（明治23）頃に発見された。地元の土地所有者が阿部荒神社跡地に土蔵を建てる折に、地中から多量の古銭が入った壺と鉢、さらに短刀、和鏡（菊花双雀鏡2面）を発見したことによるという（大谷・近藤1971）¹⁾。

その後、出土品は注目されないままとなっていたが、その中の壺と鉢が1970年3月6日付けて大社町の指定文化財（現在は出雲市指定文化財）となった²⁾。これを受けて翌年には、大社町教育委員会の大谷従二氏と島根県教育委員会の近藤正氏により「大社・鷺浦古墓」として遺跡の報告が行われた（大谷・近藤1971）。しかし、遺物の出土状況については、発見から長い年月が経過しており、不明とされている。

壺と鉢については出雲市で預かることとなり、昨年、陶磁器を実見する機会があった。また、報告から既に40年以上が経過しており、遺跡の再評価の必要性も生じてきており、陶磁器を中心として改めて報告することとした。

なお、現時点では遺跡の性格を古墓と断定しがたく、備蓄鏡の可能性も指摘されており（村上1976）³⁾、鷺浦遺跡として以下記述する。

2.陶磁器の概要

（1）壺（図2-1, PL.5-1・2）

完形品で、大きさは、高さ49.2cm、口縁部径14.9cm、胴部最大径36.9cm、底径15.7cmである。口縁部は小さな玉縁にくり、頸部は短い。肩部から胴部にかけて丸みをもち、底は平底である。胎土中には1~2mm大の長石を多く含み、高温で焼き締めている。表面は全体に暗赤褐色であり、肩部から胴部にかけてオリーブ黒の自然釉が胡麻流れ状にかかる。形状や胎土、色調等より、信楽焼と判断される。時期は口縁部の形状より、2期新段階（古相～新相）と推定され、16世紀後葉から17世紀初頭に位置づけられる（畑中2007）。

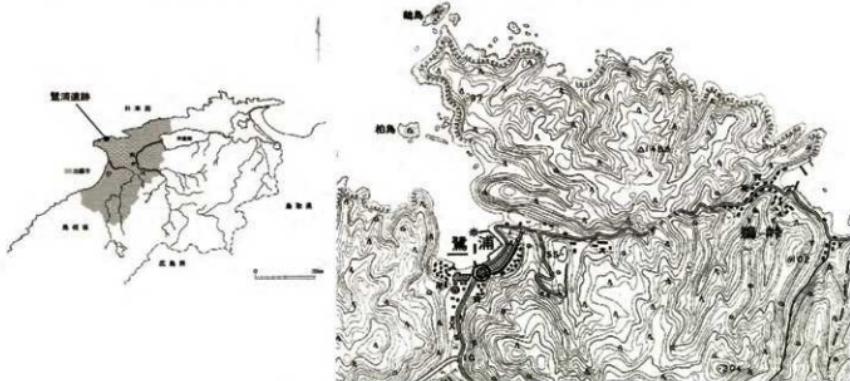


図1 鶯浦遺跡の位置（右1:25,000）

なお、内面の底部付近には、緑青が底面から8cmの高さまでに点々と付着している。「腐蝕した固まりが一荷もあった」(大谷・近藤1971, 56頁)ということであり、銭貨が多量に入っていたことを示している。

(2) 鉢 (図2-2, PL.5-3)

口縁部を半分ほど欠くが、肩部以下はほぼ良好に残っている。大きさは、高さ14.1cm、口縁部の最大径21.7cm、肩部の最大径21.5cm、底部径11.5cmである。口縁部から頸部は、「く」の字状に外に大きく開き、十二弁の花形状につくられている。底部は平底で、径1cm程の粒状の足が3個つく。胎土は密で、焼成は良く、暗赤褐色となる。口縁部内面と肩部外面には、黄褐色の胡麻がかかる。胎土や色調、および胡麻の状況からすると備前焼と推定される。この鉢は砂金袋といわれるもので、備前焼と丹波焼に類例があり、戦国時代の15世紀末から16世紀前半のものと推定される⁴。この器種は、山陰では初見である。なお、報告では、この鉢は壺の蓋として使用されたと考えられている。

口縁部の断面には、黒漆が塗られている。これは漆絞ぎ跡と考えられるが、補修の時期は不明である。また、表面は二次的に煤状のものが着いたため黒褐色となっている。

3. 小 結

鷺浦遺跡出土の壺と鉢の紹介を行ったが、終わりにあたって本遺跡の性格と時期について若干述べてみたい。

報告では、古墓とされているが、前述したように関連する具体的な説明がない。それは、出土品中に鏡と短刀があることから、古墓と考えられたであろう。その後、本遺跡について書かれたもの多くは、古墓として扱われている。しかし、大量の銭が存在していたとすると、古墓にするのは難しい。

銭貨が壺の中に大量にあったことは、底部の緑青の付着状況から裏付けられる。「付着した固まりが一荷もあった」と伝えられているので、繩銭状態で存在したであろう。どの程度入っていたかは、錢が散逸しており確認できないが、報告時には155枚の錢が残っていたという。「一荷あった」とすれば、古墓に副葬された銭貨の出土枚数からみても桁外れた多い量になる(樋口2004、目次2009)。銭貨の量からすると、備蓄銭の可能性も考えられる。しかし、短刀と鏡が共伴しているので、備蓄銭とも断定しがたい。

遺跡の所在地が港町の中で、かつ、祠跡である点がヒントを与えるかもしれないが、遺跡の性格は、現時点では不明と言わざるを得ない。今後の類例の増加を待ちたい。

埋められた時期については、報告では銭貨の最も新しい「朝鮮通寶」(初鋤年1423年)からみて15世紀前半と考えられていた。しかし、信楽焼の壺は、信楽焼編年の2期新段階(古相~新相)に該当し、戦国時代末頃から江戸時代初頭と推定される⁵。県内出土の信楽焼の壺もこの時期より多く出土している⁶。また、鉢は既に記したように、戦国時代の15世紀末から16世紀前半と推定される。壺より少し古いものであるが、鉢が煤けており、ある程度の使用期間が存在したためと思われる。

上記したごとく、鷺浦遺跡の性格については明確にできなかったが、信楽焼の壺と備前焼の鉢がセットで出土しており、交易や物資の移動を考える上で貴重な資料を提供している。また、島根半島部では数少ない中世遺跡であり、今後とも鷺浦地域の歴史を解明する上で重要な位置を占めているといえよう。

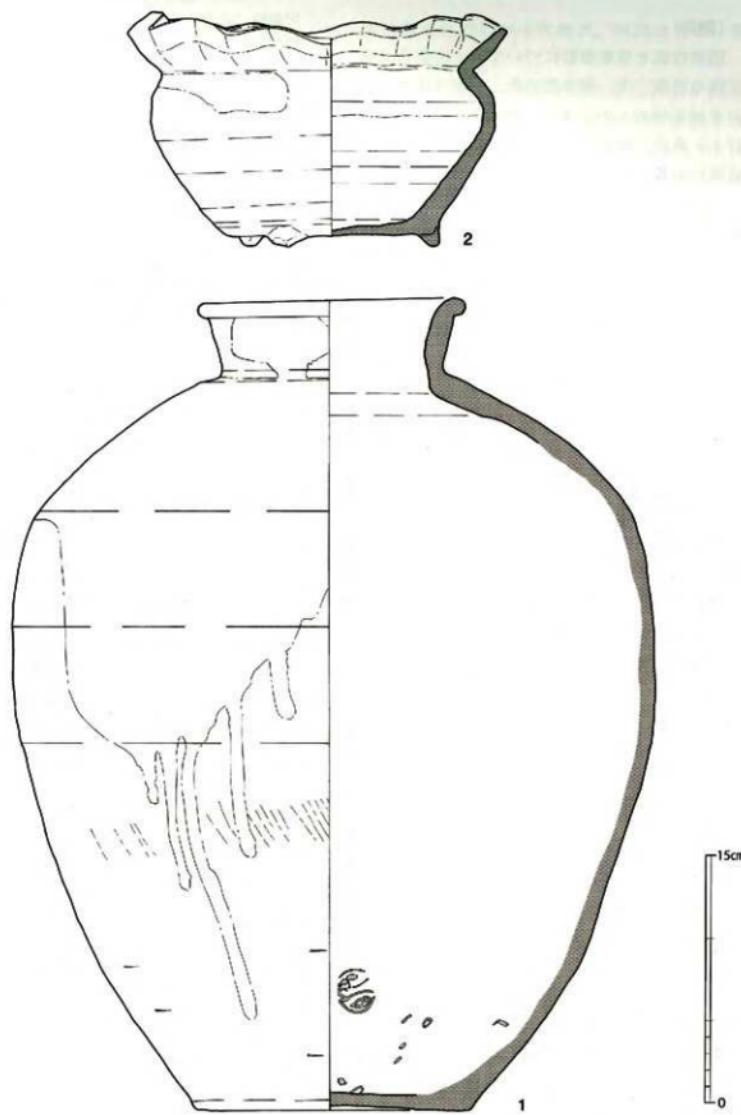


図2 出土陶磁器 (1:3)

(謝辞)

図面作成と写真撮影については、出雲市文化財課の原俊二氏、坂本豊治氏、和田みゆき氏にお手数を煩わした。また、陶磁器については、村上 勇氏、乗岡 実氏、畠中英二氏、梶山博士氏に御教示頂いた。記してお礼申し上げる。

註

- ¹ 遺跡の種別を古墓とされているが、根柢について記載されていない。また、短刀、鏡が壺の中に入っていたかどうかも確認できない。
- ² 指定名称は「阿部荒神社跡出土品」。『大社町史』(大社町史編集委員会2002)でも紹介されている。
- ³ 鶯浦遺跡については、発見時に腐蝕した銭貨の固まりが一荷もあったとの聞き取りにより、備蓄錢の

可能性に言及されている。また、壺は信楽焼、鉢は丹波焼か、備前焼とされた。

⁴ (梶山2012) 参照。形の祖型は金属製の香炉であり、それを陶器で写したものといわれている。これらは関西から中・四国地方の寺院や城跡等から7例(備前焼5例、丹波焼2例)が発見されている。

⁵ (畠中2007) 参照。「壺全体のプロポーションおよび上方に伸びる頸部の立ち上がり方、口縁部を丸く収めている形状から、金山3号窯から中井出塗の壺の窯から出土する資料に類似する」との御教示を得た。

⁶ 信楽焼の壺は安来市の富田城跡関連遺跡群や富田川河床遺跡から多く出土している。また、大田市の石見銀山遺跡でも壺の出土例が報告されている。両地域では、備前焼とは異なり、擂鉢や壺は出土せず、壺に限られている。但し、富田川河床遺跡では鬼桶水差が出土している(守岡2011)。

参考文献

- 大谷従二・近藤正 1971 「大社・鶯浦古墓」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅲ集、島根県教育委員会、56~58頁
- 梶山博史 2012 「茶陶」の定義について—モデルとコピーの視点から—』『備前歴史フォーラム2011資料集 備前と茶陶』備前市教育委員会
- 大社町史編集委員会 2002 『大社町史 史料編 (民俗・考古資料)』大社町
- 樋口英行 2004 「中世墓出土の銭貨」『山陰の出土銭貨』出土銭貨研究会
- 目次謙一 2009 「島根県『中世の墓と銭』第16回出土銭貨研究会
- 村上 勇 1976 「県下の出土陶磁器の調査報告について」「八雲立つ風土記の丘」18
- 畠中英二 2007 『続・信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版
- 守岡正司 2011 「島根県内出土の信楽焼(予察)」「山陰地方における越前・常滑系陶器」山陰中世土器検討会

「杵築」と注記された砥石1点がある【図5-10】。何によったかは不明だが、「大谷ノート」には「鹿倉山」とあるので、この砥石は現在の大社小学校・中学校敷地に広がる鹿藏山遺跡(出雲市大社町杵築南)の出土品とみてよからう⁹。角柱状をした砂岩質の砥石で、一端は丸い。端面には十字形の研ぎ跡がある。長さ8.2cm、幅4.2cm、厚さ3.2cm、重量140g。

「千代衛目録」「大谷ノート」に掲載されない石器に「ヒノ川郡/上朝山」「コモリ穴岩」と注記のある砥石破片1点がある【図5-11】。砥面を1面だけ残す資料である。「コモリ穴岩」の記載から、出雲市朝山町内朝山神社附近と推定されるが¹⁰、周辺に遺跡は知られていない。

これ以外に、「大谷ノート」によると、「大社直線道¹¹」と注記された磨製石斧破片(長さ7cm・幅5.5cm)1点、および、「知井宮村間谷」(出雲市知井宮町間谷)で採集された閃綠岩製の磨製石斧破片(長さ11cm・幅5.5cm・厚さ2.5cm)があったようだが所在不明である¹²。

b 八東郡

長谷川千代衛・愛雄氏が旧八東郡乃木村在住¹³であったこと、そして愛雄氏が大正2~7年(1913~19)に八東郡内の小学校に勤務されていたこともあって資料が多い¹⁴。宍道村と来待村での採集資料はなく、宍道湖南岸では玉湯村¹⁵がいちばん西である。

玉湯村 玉湯村(現・松江市玉湯町)での採集資料は6点あるが、うち1点(「大字玉造字大門」採集¹⁶)は自然礫なので、残り5点を紹介する。年代の判明するものはすべて明治年間の採集品である。

まず、小型の打製石斧が1点ある【図3-6】。両側縁に粗い剥離を加え、刃部だけを研磨した局部磨製石斧である。一端を欠損する。現存長8.9cm、幅4.5cm、厚さ2cm、重量97.5g。玉湯村内で出土したことしかわからない。

次に、叩き石が2点ある。

一つは、「大字林村字根尾越」での明治42年(1909)採集資料である【図4-4】。長楕円形をした大型品で、両端に敲打痕がある。長さ20cm、直径7.6×8.5cm、重量1960g。根尾地区は松江市玉湯町にあり、玉湯川と本郷川との間にあって宍道湖に面する。「根尾越」の字名はわからなかったが、現在の玉湯中学校南の谷を上がって林村地区へ至る道の峠のあたりであろうか。

もう一つは、明治27年(1894)採集の「湯町村大字林(林村)」のもの【図4-5】。棒状の叩き石で、両端にわずかに敲打痕がある。長さ12.5cm、直径3.8×2.3cm、重量170g。注記の字名は「なかぐら」と読めそうなので、小字「中倉」あるいは「中蔵」であろう¹⁷。林村地区の本郷川右岸の小字名で、近傍に中倉古墳群があるが、集落遺跡は未確認である。

「林村」採集の石錘1点がある【図5-5】。砂岩質の小礫を加工した小型の石錘である¹⁸。長さ6.5cm、幅4.8cm、重量80g。

5点目は、「玉湯村大字玉造」と注記された砥石である【図5-14】¹⁹。直方体をした硬質の石材で、1面には長軸に平行する9条の研ぎ溝がある。反対の面には3条が認められる。短辺側の側面にも擦痕が確認できる。長さ12cm、幅8.5cm、厚さ3.6cm、重量720g。

乃木村 乃木村²⁰(松江市乃木地区)関係の石器は、「千代衛目録」と「大谷ノート」を総合すると40点があったようだ。そのうちの26点が現存する。うち5点は自然礫または石器とは思えないでの、掲載しなかった。

明治25年(1892)から大正6年(1917)の約25年間にわたる採集品で、一つだけ昭和11年(1936)の収集品がある。これは、コレクション全体でも最も新しい年次の資料である。

採集地域は、松江市乃木・浜乃木・上乃木・乃木福富・乃白の各地区に及んでいる。

3.「長谷川コレクション」の全容

長谷川千代衛氏と愛雄氏が収集され、現在、出雲弥生の森博物館に収蔵されている考古資料、これを「長谷川コレクション」と名付けたいと思う。この考古資料群は、ほんのごく一部が山本先生によって紹介された以外、ほとんどが未公表のまま1世紀近い年月を経てきた。だが、その意義はいささかも衰えるものではない、と思う。それは、次の2つの理由からだ。

一つは資料のほとんどに墨書きの注記があること。時に土器片の一面を覆いつくすほどの過剰と思える注記もあるが、出土地点と出土状況の記録としてきわめて貴重である。

もう一つは、この資料が長谷川氏の手元を離れた後の半世紀、散逸しなかったこと。これは、旧大社公民館および旧大社考古館でこれを収蔵管理された故大谷從二氏の業績である。

「長谷川コレクション」の記録として2つの文書が出雲市文化財課に保管されている。

①「松江市長谷川千代衛氏蒐集/考古資料目録」

これは、二つ折り和紙10葉20頁に墨書きされた資料の一覧表である。おそらく長谷川千代衛氏が自ら書きとめられたもので、それに、表題として大谷氏の手になる「昭和三十一年九月四日／ 大社公民館に購入」とペン書きされたザラ紙の表紙が付く。これを以下、「千代衛目録」と略す。

②「考古資料略図」

ザラ紙の反故30枚にペン書きされた略図集⁴。表紙に「松江市雜賀町三ノ二 長谷川愛雄氏所蔵」「昭和三十一年九月四日／ 大社町公民館譲受購入」とある。大谷從二氏が、資料のうち主要なものをスケッチとともに記録した文書である。掲載資料のほとんどは現存するが、一部に確認できなかった資料がある。この記録を以下「大谷ノート」とよぶ。

さて、「長谷川コレクション」が草創期の島根県考古学界に大きく寄与したことについては山本先生も述べられているが、ここにあらためてその全貌を示して光をあてたいと思う。「長谷川コレクション」の意義を再検討し、資料が収集された100年前の島根を振り返ることも無意味とはいえない。

以下では、「千代衛目録」と「大谷ノート」および「山本清考古資料」をベースとし、「長谷川コレクション」の全容を示す。資料に残された注記と遺物種別をまとめた。現存する資料については、可能な限り図示することとし、現在は所在不明になっている資料の一部は「山本清考古資料」で補った。

以下、I 石器編、II 土器編、III 瓦編、IV 金属器編に分類してその内容を記述したい。出土遺跡の記録はほぼないので、それらは記載の字名で示す。都別に記述をすすめる⁵。

I. 石器編

a 篠川郡⁶

出雲大社境内遺跡（出雲市大社町杵築東）と関わる可能性のある資料が1点ある【図2-1】。現状では貼付された紙片に「杵築」とあるのを確認できるのにとどまるが、「大谷ノート」に「杵築／大社／文庫北方／谷」と記録されていて、これが出雲大社境内荒垣の西北隅にあった文庫⁷北方の谷から発見されたらしいとわかる。

これこそ、柴田常惠が実見して「出雲大社の神域が、石器時代の遺跡であるは一奇と云ふべき」と述べた「立派なる冠石壹個」（柴田1910）そのものとみて間違ひなかろう。

石器はきのこ形をしていて、頭部および頸部が認められるので「石冠」かもしれないが、その分布域からは大きく外れる（中島1983）資料なので、断定は避けたい。底面は研磨痕が顕著である。高さ9.3cm、長径10cm、短径9.3cm、重量830g。

「杵築」と注記された砥石1点がある【図5-10】。何によったかは不明だが、「大谷ノート」には「鹿倉山」とあるので、この砥石は現在の大社小学校・中学校敷地に広がる鹿藏山遺跡(出雲市大社町杵築南)の出土品とみてよからう⁸。角柱状をした砂岩質の砥石で、一端は丸い。端面には十字形の研ぎ跡がある。長さ8.2cm、幅4.2cm、厚さ3.2cm、重量140g。

「千代衛目録」「大谷ノート」に掲載されない石器に「ヒノ川郡/上朝山」「コモリ穴岩」と注記のある砥石破片1点がある【図5-11】。砥面を1面だけ残す資料である。「コモリ穴岩」の記載から、出雲市朝山町内朝山神社附近と推定されるが⁹、周辺に遺跡は知られていない。

これ以外に、「大谷ノート」によると、「大社直線道¹⁰」と注記された磨製石斧破片(長さ7cm・幅5.5cm)1点、および、「知井宮村間谷」(出雲市知井宮町簡谷)で採集された閃綠岩製の磨製石斧破片(長さ11cm・幅5.5cm・厚さ2.5cm)があったようだが所在不明である¹¹。

b 八東郡

長谷川千代衛・愛雄氏が旧八東郡乃木村在住¹²であったこと、そして愛雄氏が大正2~7年(1913~19)に八東郡内の小学校に勤務されていたこともあって資料が多い¹³。宍道村と来待村での採集資料ではなく、宍道湖南岸では玉湯村¹⁴がいちばん西である。

玉湯村 玉湯村(現・松江市玉湯町)での採集資料は6点あるが、うち1点(「大字玉造字大門」採集¹⁵)は自然礫なので、残り5点を紹介する。年代の判明するものはすべて明治年間の採集品である。

まず、小型の打製石斧が1点ある【図3-6】。両側縁に粗い剥離を加え、刃部だけを研磨した局部磨製石斧である。一端を欠損する。現存長8.9cm、幅4.5cm、厚さ2cm、重量97.5g。玉湯村内で出土したことしかわからない。

次に、叩き石が2点ある。

一つは、「大字林村字根尾越」での明治42年(1909)採集資料である【図4-4】。長楕円形をした大型品で、両端に敲打痕がある。長さ20cm、直径7.6×8.5cm、重量1960g。根尾地区は松江市玉湯町にあり、玉湯川と本郷川との間にあって宍道湖に面する。「根尾越」の字名はわからなかったが、現在の玉湯中学校南の谷を上がって林村地区へ至る道の峠のあたりであろうか。

もう一つは、明治27年(1894)採集の「湯町村大字林(林村)」のもの【図4-5】。棒状の叩き石で、両端にわずかに敲打痕がある。長さ12.5cm、直径3.8×2.3cm、重量170g。注記の字名は「なかぐら」と読みそうなので、小字「中倉」あるいは「中藏」であろう¹⁶。林村地区の本郷川右岸の小字名で、近傍に中倉古墳群があるが、集落遺跡は未確認である。

「林村」採集の石錘1点がある【図5-5】。砂岩質の小礫を加工した小型の石錘である¹⁷。長さ6.5cm、幅4.8cm、重量80g。

5点目は、「玉湯村大字玉造」で注記された砥石である【図5-14】¹⁸。直方体をした硬質の石材で、1面には長軸に平行する9条の研ぎ溝がある。反対の面には3条が認められる。短辺側の側面にも擦痕が確認できる。長さ12cm、幅8.5cm、厚さ3.6cm、重量720g。

乃木村 乃木村¹⁹(松江市乃木地区)関係の石器は、「千代衛目録」と「大谷ノート」を総合すると40点があったようだ。そのうちの26点が現存する。うち5点は自然礫または石器とは思えないでの、掲載しなかった。

明治25年(1892)から大正6年(1917)の約25年間にわたる採集品で、一つだけ昭和11年(1936)の収集品がある。これは、コレクション全体でも最も新しい年次の資料である。

採集地域は、松江市乃木・浜乃木・上乃木・乃木福富・乃白の各地区に及んでいる。

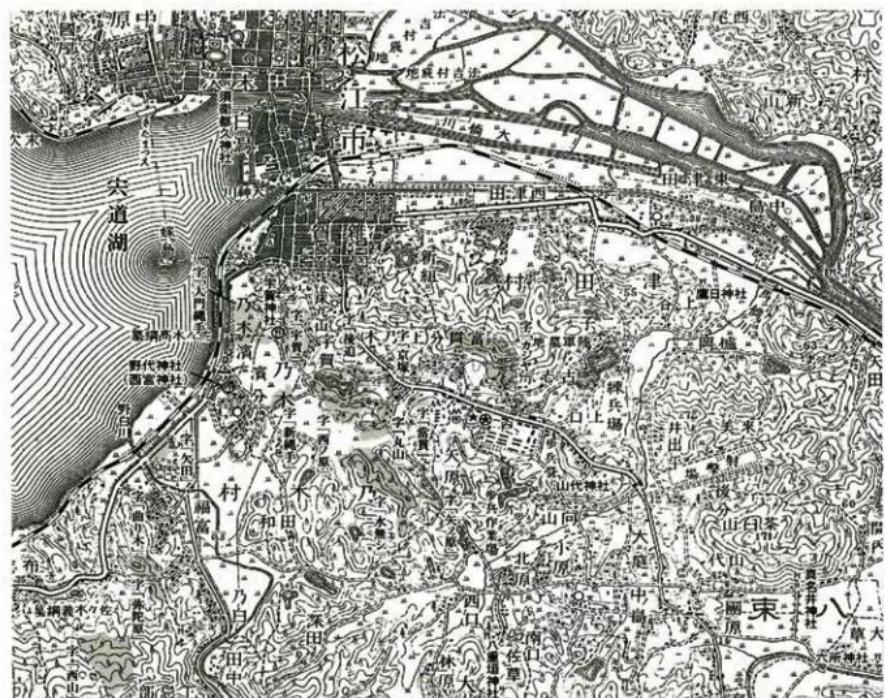


図1 松江市乃木地区周辺地図

山居川右岸（北岸）の丘陵地に所在する字「当貫」「西ノ原」「宇賀」などが多いが、「当貫」の東に近接する「京塚」「坪根」のほか、山居川左岸（南岸）で乃木二子塚古墳東方の字「矢ノ原」や「水無し（水無尻）」のものもある。ほとんどの地点は『松江市遺跡地図』に遺跡として記載がなされていない²⁰。

乃木地区から出土した石器は15点を掲載した。磨製石斧が2点ある【図2-2・4】。

図2-2は、「西原」（現松江市上乃木3丁目周辺）で採集された刃部の破片である。刃部に欠損がある。現存長8.2cm、幅5.6cm、厚さ4.3cm、重量290gである。

図2-4も刃部を含む磨製石斧破片。字「宇賀」（現上乃木1丁目周辺）出土²¹。現存長11.0cm、幅6.2cm、厚さ4.1cm、重量398gである。

打製石斧は3点ある【図3-7～9】。

図3-7は字「宇賀」（現上乃木1丁目周辺）での1913年採集石器。やや軟い砂岩質の扁平な礫を素材にし、周縁を打ち欠く。現存長10.6cm、幅6.4cm、厚さ3.1cm、重量314g。

図3-8はバチ形をした大型の打製石斧。粗雑な作りで、表裏と側面の一部に自然面を残す。全長21.5cm、幅7.6cm、厚さ2.7cm、重量520g。採集地点は不明である。

図3-9は「西乃原」（現上乃木3丁目周辺）採集の打製石斧である。周縁に比較的細かな剥離を加えて撥形平面を作っている。刃部を一部欠損する。現存長14.8cm、幅10.4cm、厚さ1.6cm、重量356g。

叩き石は6点【図4-6～9、図5-1・2】を掲載した。

図4-6はチャート質の棒状の叩き石で、一方の端に打撃による剥離痕がある。全長17.3cm、幅4.9cm、厚さ2.9cm、重量317g。「当貫」(現上乃木4丁目東部)での採集資料である。

図4-7は砂岩質の叩き石と思しき資料。円柱状で両端は丸い。全長12.3cm、直径5.3×4.0cm、重量330g。字「丸山」は字「西原」の南側、山居川右岸の字名(現上乃木4丁目)。

図4-8も砂岩質の叩き石。厚みのある小判形をしており、表裏と側面に敲打痕跡がある。長さ13.0cm、幅9.7cm、厚さ5.8cm、重量1220g。出土地点の字「水無尻」は、字「丸山」南方の丘陵地である(現上乃木9・10丁目)。

図4-9はやや不整形な叩き石。現存長12.9cm、幅8.4cm、厚さ5.9cm、重量620g。字「西ノ原」の採集品である。

図5-1は、一端を欠損した俵形の叩き石。長さ11.8cm、幅7cm、厚さ5.3cm、重量580g。字「京塚」(現上乃木3丁目)での採集品。

図5-2は、中央部がやくびれた俵形の叩き石。現在の県立松江南高校周辺での採集品と推定される²²。一端を欠損するが、端部には敲打痕跡がある。現存長12cm、幅7.0cm、厚さ4.7cm、重量590g。

乃木地区採集の砥石は3点ある。

図5-12は、砂岩質の扁平な砥石。7.0×5.2cmほどで、厚さ1.6cm、重量48g。「西ノ原」(現上乃木3丁目周辺)採集品。

図5-13は、凸字形の石製品である。全面に擦痕があるが、いちばん厚みのある底面が最も磨り減る。全長11cm、最大幅7.3cm、上端幅4.4cm、厚さ2.8cm、重量300g。字「坪根」(現上乃木4丁目)の採集品である。

図5-15は台形をした砥石。石質は粗い。表裏と側面に使用痕がある。長さ12.1cm、幅7.6cm、厚さ4.2cm、重量567g。字「宇賀」の採集資料で、明治41年(1908)3月8日と9日に採集された破片が接合している。

福富地区での採集資料は6点あったようだが、磨製石斧5点のうち2点は現存せず、破片3点が残っている。

図2-3は、刃幅5cmほどの石斧。全体に丁寧に研磨され、刃部には使用にともなう破損がある。現存長7.8cm、幅6.0cm、厚さ4cm弱、重量215g。

図2-5は、乳棒状の磨製石斧。側刃を欠損する。現存長13.4cm、現存幅3.8cm、厚さ3.5cm、重量290g。

図2-6は、基部の尖った石斧破片。破面には、敲打痕がある。現存長11.6cm、現存幅6.4cm、厚さ4.1cm、重量422g。

これら3点の詳細な出土地は不明だが、「千代衛目録」記載の2点の石斧出土地として、字「乗越」「曲り木」が確認できる。「曲り木」は福富育種場(のち島根県農事試験場、後述)が所在したところである²³。

また、「神立遺跡 明治四十年五月十三日採取」と注記された資料がある。これは神立遺跡(松江市乃木福富町、『松江市遺跡地図』遺跡番号D012)出土と思われるが、『松江市遺跡地図』に示された神立遺跡は、字「腰前」にあり、字「曲り木」の北東にある字「神立」と場所が違う(乃木郷土誌編纂委1991)。本資料に出土字名の記載はない。杏形をした板状の石で周縁部には明瞭な剥離痕は認めがたい。自然礫とみて掲載しなかった。

乃白地区では採集資料3点のうち2点を確認できた。

図2-7は、石斧破片。基部は尖る。現存長8.5cm、幅4.8cm、厚さ3.1cm、重量190g。採集地の「御田原」は「ミダハラ」と読めるから、福富地区との境にある字「弥陀原」であろう²⁴。

図2-8も石斧基部の破片。現存長7cm、現存幅4.5cm、厚さ3.1cm、重量120g。

図2-5~8の石斧は、基部が尖った乳棒状で、縄文時代のもの可能性が高いだろう。

「千代衛目録」に「大字野白西山」「弁慶が釜古墳」北方での石器採集記録がある。『島根縣史 四』(野津1924)には八束郡内の古墳の一つとして、「乃木村大字福富字西山 発掘 俗に弁慶ヶ釜と稱す」が掲載されている。字「西山」は乃白地区の南西隅に位置するが、『松江市遺跡地図』に同名の古墳は記載されていない。

大庭村 磨製石斧 1点があつたようだが、所在不明である。また、六所神社裏採集の資料は掲載していない。

津田村 旧津田村関係では、大字「東津田」出土の石器3点(叩き石1点、磨製石斧1点)と大字「古志原」出土の磨製石斧1点、そして打製石斧2点が現存している【図2-9~11, 3-10, 4-1, 5-3】。

図2-9は、1918年に字「神守殿」で採集された磨製石斧破片である。わずかに刃部が残っており、表面はよく磨かれている。現存長10.0cm、厚さ4.0cm、重量240g。この石斧は、「大谷ノート」に「高日神社前」と記録されているように、津田村の耕地整理²⁵で見つかったものであり、『松江市遺跡地図』(松江市教委1991)に鷹日神社前遺跡(遺跡番号E005、石斧出土)とされているものであろう。

図2-10は、弥生時代の大型蛤刃石斧の刃部破片。石材の目が長軸方向に走る。現存長5.5cm、幅5.8cm、厚さ4.2cm、重量190g。「櫛岡畦畔」とあるもので、馬橋川下流域の櫛岡遺跡(松江市東津田町)ないし石台遺跡出土の可能性がある。

図2-11は、弥生時代の大型蛤刃石斧の基部破片。現存長12.4cm、幅6.4cm、厚さ4.8cm、重量650g。この磨製石斧に関しては、「山本清考古資料」(A-35-16)に出土地点の地図があり、山代神社参道が旧師团街道(現国道432号線)から分かれた北西の道路北側、旧練兵場へ至る路の脇での採集とわかる。この地点は周知の遺跡とはなっていない。

これら以外に「千代衛目録」に大字「古志原」の「山代神社前馬場」採集の磨製石斧がある。『松江市遺跡地図』は、その周辺での遺跡を記載していない。

打製石斧は2点ある。ともに古志原出土。

図3-10は、ほぼ全形を留める撥形の打製石斧。全長12.6cm、幅6.5cm、厚さ1.9cm、重量224g。

図4-1は、刃部側を欠損した打製石斧。現存長10.8cm、現存幅7.6cm、厚さ2.6cm、重量250g。

叩き石が1点ある【図5-3】。楕円形平面をしており、表裏と側面に敲打痕がある。全長12.7cm、幅7.8cm、厚さ4.3cm、重量570g。

なお、柴田常惠が「八束郡津田村字古志原磨石斧、打石斧」とあげるもの(柴田1910, 370頁)は、上記の石斧のどれかだろう。

川津村ほか 旧川津村²⁶ ほか松江市街北東地域出土の石器はどれも現存していない。

「千代衛目録」石第1号は、明治23年(1890年)採集の「西川津村尾茂祖谷」出土の磨製石斧である。この石器は『新修松江市誌』(同編纂委1962 83頁)の「松江市内発見縄文式石斧」に掲載されたもの(同頁4)であり、山本先生は「川津、嵩山西麓」(山本資料A-35-8)とされている。渡邊貞幸先生のご教示によれば、「尾茂祖谷」は現在の川原町の集落(旧川原村)に西隣する谷に位置する字名だが、ここは旧西川津村ではなく、明治23年当時、持田村大字川原に属していた。ただし、この場所は「東川津村」に隣接するので、「西川津村」との誤解を生んだのではないかと推測される。なお、この石器は「大谷ノート」にも記載があってわざわざ「研磨美」とされているので、所在不明が残念である。「山本清考古資料」の図を掲げる【図3-4】。

この他、「大谷ノート」に「松江樂山附近」の打製石器が記録されているが、これも所在不明。

講武村 佐太講武貝塚（松江市鹿島町佐陀宮内・名分）出土の石錘が2点ある【図5-6・7】。

図5-6は、チャート質の扁平な円碟を素材とした石錘。両端を打ち欠いていたと思われるが、一方は剥離面が新しい。全長・幅7.3cm、厚さ3.2cm、重量242g。「山本清考古資料」(A-35-29)に「木村嘉造の畠出土」とある。

図5-7は、チャート質の棒状の円碟を加工した石錘である。全長8.2cm、幅3.1cm、厚さ1.8cm、重量67.5g。

磨製石斧1点は所在不明である。

千酌村 「千酌」の紙ラベルが貼られた資料1点があるが、おそらく自然縞である。この他、「千代衛目録」に千酌の「尔佐神社北後路傍」採集の磨製石斧が記載されるが、現存しない。【増補改訂 島根県遺跡地図】I（島根県教委2003）の爾佐神社脇遺跡（松江市千酌町）ないし千酌神社裏遺跡に関わるものであろうか。

片江村 大正9年（1920）採集の石器がある。採集地「管浦」とあるが「菅浦」であろう。【増補改訂 島根県遺跡地図】I（島根県教委2003）に記載の菅浦遺跡(I31, 石斧)出土か²⁷。

c 松江市

明治22年（1889）市制施行の旧市街地域であるため、資料数は多くない。

出色の資料として完形の磨製石斧がある【図3-1】。「松江市東茶町と西京橋交叉点/五六間東」で採集された石斧であり、「新修 松江市誌」（松江市誌編纂委1962）に山本清先生が紹介されたものである（同書86頁1）。ここで「茶町、須衛都久神社附近」とだけ記述されたため、「松江市遺跡地図」（松江市教委1991）は、これを須衛都久神社境内出土としているが、不正確。「山本清考古資料」(A-35-10)には石斧の実測図とともに出土地の略図が付されており、神社から約100m北東の國暉酒造前あたりでの採集とわかる。これは注記とも矛盾しない²⁸。

d 飯石郡・大原郡・仁多郡

出雲山間部の3郡の出土石器は、各々1点があったようだが、いずれも残っていない。

「大谷ノート」に「飯石郡波多村／闇」と記録された石器は、「山本清考古資料」(A-35-36)によれば、磨製石斧の刃部破片で、幅5.8cm、残存長6.5cm、厚さ3.0cmの大きさ。「灰青色、黒紺色の斑を交え美しく研」との注記がある。

出土地は、現在の雲南省掛合町波多である。

旧大原郡域の資料としては、「千代衛目録」に「日登村大字東日登」出土石鎌の記載がある。現在の雲南省木次町日登。「山本清考古資料」(A-35-51)に略図があるものの、これには「散逸して現存せず」とある。もちろん現存しない。

旧仁多郡域の石器に、「仁多郡横田 横田川」の石斧があった（「山本清考古資料」A-35-35）。

e 安濃郡・邇摩郡

旧石見国域採集の石器は3点ある。いずれも明治45年（大正元・1912）収集の資料である。

邇摩郡内の資料に、やや細身の磨製石斧破片1点がある【図3-3】。「ニマ郡久利村／大字松代／字平野原」（大田市久利町松代）と記され、現存長8.9cm、幅5.2cm、厚さ3.3cm、重量201g。おそらく長谷川愛雄氏の収集品だろう²⁹。

安濃郡内出土の石器は2点ある。

図3-5は細身の磨製石斧。断面ほぼ円形で基部は細い。繩文時代の石斧だろう。全長15cm、幅5.1cm、厚さ3.7cm、重量450g。

図5-9は石錘。全長6.3cm、幅4.3cm、厚さ1.4cm、重量70g。

ともに明治45年（1912）「川合村大字南」（大田市川合町）での収集品だが、「島根県遺跡地図II（石見編）」（島根県教委1992）には、当該地域に縄文・弥生時代の遺跡は掲載されていない³⁰。

註

f 隠岐・知夫郡

「長谷川コレクション」の隠岐島の資料は、土器を含め明治41年（1908）採集に限られ、しかも島前の資料だけである。おそらくこの年に島へ渡られた時の採集資料なのである。自然疊とみられるので割愛した。

g その他

宮崎県（日向国兒湯郡・西臼杵郡）と岐阜県（美濃國武儀郡）で見つかった石斧や石鎌があつたらしいが、現存しない。現存するのは、「日向」の貼紙のある石錐1点のみ【図5-8】。「千代衛目録」記載の宮崎県や福岡県の資料が、明治28年（1895）に集中するのは、千家氏との九州布教旅行がこの前後だったからだろうか。

また、「山本資料」（A-35-51）には、「1. 佐太村発掘青 大形勾玉／2. 津田村賣豆紀発掘

班勾玉／3. 塩冶村築山発掘 赤勾玉／4. 大庭村黒田畦発掘 薄色勾玉」4点、および「石鎌／1. 庄原村岡ノ目」が記録されているが、「散逸して現存せず」とされる。

「佐太村」（松江市鹿島町）の「大形勾玉」は前半期の古墳出土品か。「塩冶村築山」は、上塩冶築山古墳か築山遺跡の古墳群（ともに出雲市上塩冶町）に関係するものだったのだろう。

h 小 結

以上、「長谷川コレクション」の石器45点を図示した。このほかに、自然疊と判断して図を掲載しなかった資料が10点あるので、合計55点の石器等が現存する。石器については、その概要と出土遺跡あるいは出土土地の推定などをおこなったが、いずれも縄文土器や弥生土器が合わせて採集されているわけではないので、その時代・時期については詳しくは述べなかった。

土器および瓦についても、引き続き整理を進めてその全貌を示したい。
（続く）

¹『意宇郡神社明細帳』には、乃木村当貫にあった稻荷神社が明治7年（1874）に遷座した先を「長谷川千削ノ私邸」とする。これが長谷川家の居宅であろう。ここは、後に傷痍軍人島根療養所建設地となつたようだから、現在の国立病院機構松江病院（もと国立療養所松江病院、松江市上乃木町5丁目）附近だったのだろう。

²初版の奥付によれば、

明治32年2月21日印刷、明治32年2月28日発行、著作・発行は長谷川千削氏と長谷川千代衛氏（島根縣八束郡乃木村大字乃木230番地屋敷）、佐々鶴城氏校閲、題字は国造千家尊紀氏。印刷は報光社（島根縣松江市殿町50番地）。

「山本資料」には「三版まで出版」とあるが、国立国会図書館のデジタルアーカイブ書誌情報によれば、明治40年に増補訂正第4版が出版されている。佐々鶴城については（梶谷1974a）を参照。

³これは「千代衛目録」（後述）にある「石 第一号」で明治23年（1890）年4月5日の発見である。

「山本資料」には「明治10年代より考古に興味を起したるか（今90に近い人が15才の時という）」とあって、山本先生の計算式がメモ書きされており、「その人90才として明治13」と注記されている。ただ、これだと愛雄氏は明治元年前後の出生となり、時に千代衛氏13歳前後である。愛雄氏は明治43年3月26日に某学校（師範学校か？）を卒業されたことが石器の注記によってわかるが、当時、齢40歳を越えて学校を卒業することはないだろう。愛雄氏の生まれは明治8年（1876）頃で、明治23年の石器発見が千代衛氏とともに愛雄氏の考古学への傾倒を導いた、と推測しておく。これなら、愛雄氏出生時に千代衛氏は22歳くらいで納得しやすい。

⁴ザラ紙は「島根縣視聽覚ライブラリー 映画上映報告」の用紙である。

⁵行政区分については、明治末年（1912年）の市町村名による。旧出雲国は、明治22年（1889）の行政改革により、1市10郡（5町135村）の構成となった。その後、明治29年（1896）に簸川郡と八束郡の成立などがあり、1912年時点では、1市6郡（7町131村）であった。

⁶出雲西部の宍道湖西岸地域は、奈良時代以来、神門郡・出雲郡・橋縫郡の3郡で構成されていた。明治維新後の明治4年（1871），全国的に「区制」が導入されたため、島根県内では、神門郡が「八大区」，出雲郡が「第九大区」，橋縫郡が「第十一大区」に改称されたものの、この「区制」は明治11年（1878）の郡区町村編成法で廃止された。翌明治12

年(1879)1月には、神門郡には1人の郡長が、出雲郡と橋綫郡には兼任郡長が置かれて各郡役所が設置されたが、同年11月の県会決議によって出雲・橋綫郡役所は神門郡役所に合併となった。この時には2人の郡長が維持されたが、まもなく神門郡長が出雲・橋綫郡長を兼務するに至った。このような状況下、3郡合併の機運が醸成され、ついに明治29年(1896)に3郡は合併して「簸川郡」が誕生した。

簸川郡での採集品(石器・土器とも)について注目されるのは、資料の中の明治36年(1903)の採集品3点には「簸川郡」と記されているのに対して、明治37年~40年(1904~1907)の採集品で郡名を示した10点中9点には「ヒノ川郡」と表記されていることだ。これは単なる憶測にすぎないかもしれないが、明治37年(1904)元旦の山陰新聞に掲載された村上壽夫の一文「出雲、石見の郡名に就いて」が影響したのではないか。

村上壽夫(号・琴屋)は、文久元年(1861)生まれ。松江市奥谷の人で、生来詩才に富み、旧松江藩士・平賀靜遠に師事して漢詩・和歌・俳句等の達人とされた。のちに官界に入るや、八東郡長・簸川郡長や島崎郷司を歴任した。かたわらで「剪淞吟社」の重鎮として「島根評論」に「島根詩壇」を連載するなど、漢詩界に活躍した。退官後は、東京で松平家家令として仕えた。昭和7年(1932)没、享年72才(伊藤編1980などによる)。

さて、村上壽夫は明治37年元旦の寄稿で、自らが八東郡長となったことの因縁は、明治23年(1890)5・6月頃に府県制都制施行委員会の県委員の一人として郡の合併について協議した時に、そこで、意宇郡・島根郡・秋鹿郡を合した新郡の名称として「八東郡」を提唱したことにある、と回顧的に語っている。「八東郡」はもちろん、八東水津野命にちなむ。

さらにこの時、ほかの2・3郡を合併した新郡の名称について、仁多郡+大原郡=簸上(ひのかみ)郡、出雲郡+橋綫郡+神門郡=簸下(ひのしも)郡、を提案したという。簸伊川の上流域と下流域、つまり、簸川上(ひのかわかみ)と簸川下(ひのかわしも)に基づく名称である。

後の「簸下郡」は、一時、大国主命にこと寄せた「大国郡」と定まりかけたが、最後には「簸川郡」に落ち着いたという。村上は「簸上・簸下郡」の経緯も踏まえて、「簸川郡」を「ひのかわぐん」と呼ぶべきと主張した。そして「本家本元の簸川郡(ヒノカハグン)の人まで「ヒカハ」と呼んで居るのには、聞き苦しいのみならず。元來名を亂ると云ふ事は、輕々に看過すべき事では無いのである。」と、この稿を結んでいる。

わたしは、この記事を読んだ長谷川千代衛氏が触発されて、「ヒノ川郡」と注記方法を変更したのではないか、と想像している。

なお、戦前に陸軍陸地測量部が発行した25,000分の1地形図「出雲今市」「大社」(1918年発行)「平田」(1936年発行)を見ると、郡名の「簸」に「ヒノ」のルビがあつてある。

蛇足だが、平成23年(2011)10月に簸川郡斐川町は出雲市と合併して「簸川郡」の名称は消えた。しかし、合併後の新出雲市の範囲は、ほぼ明治29年当時の簸川郡の境域にはかならない。簸川郡復活?。⁷「文庫」は現在、荒垣内の東北隅にあるが、これは大正3年(1914)に移されたもので、それまでは荒垣の西北隅、現在、彰古館が建つ場所附近にあった(西山編2003, 34・35頁)。資料の採集年次は不明だが、明治43年(1910)までの発見と推定でき、地形的に境内地の東北には遺跡を想定し難いから、注記に「ヒノ」のルビがあつてある。

現彰古館東北で2001年におこなわれた発掘調査では、繩紋時代晩期末の土器が出土している(石原2004)。

⁸鹿藏山遺跡は大社小学校敷地(大社町杵築南字鹿藏山(しかくらやま))を中心とする遺跡で、1935年に小村尚司氏によって発見された(小村1982)。

「II土器編」でも述べるように、大社小学校の南にある現大社中学校敷地(杵築南字鹿城山(かしきやま))、旧県立第三中学校のち旧杵築中学校のち県立大社高校の敷地)周辺では、すでに明治36年(1903)には須恵器が採集されている。これは、明治34年(1901)7月に開始された、旧制中学校移転にもなう造成工事(翌年4月に移転、明治36年(1903)11月に開校式挙行(大社町史編纂委2008, 588~592頁))で出土した資料と推定される。二つの校地は字名が違う(梶谷1974b)が、現状では両者あわせて鹿藏山遺跡と呼称している(大社町史編纂委2002, 302~313頁)(石原・露梨2005)。

⁹間和彦氏によると、朝山五山の一つ「冠山」を横山水福「出雲國風土記考」は「宇比多伎山御社の南に在る岩にて里人はコウモリ岩と云」にあてているが(間1999), この岩のことであろう。加藤義成が「土地の人は冠岩と呼んでいる」と述べる岩のようである(加藤1962)。「宇比多伎御社」は現在の朝山神社である。

¹⁰国鉄大社線の開業にともない、出雲大社勢瀬りと大社駅とを結んだ直線道路。大正3年(1914)開通。翌年には現行の「神門通り」と改称された(大社町史編纂委2008, 690頁)。

¹¹「出雲市遺跡地図」(出雲市教委1993)によれば、出雲市知井宮町間谷地内には、①間谷遺跡(遺跡番

号N42), ②間谷西遺跡(N46), ③古垣内遺跡(N47)が記載される。②③は「消滅」。①については、「所在不明」とあって地図にドットがない。遺物として「石斧」があがり、参考文献に(赤澤ほか1983)が掲出されるが、同書には須恵器の出土を記すのみで、石斧出土の記述はない。

2006年には間谷東遺跡、2007年には間谷西II遺跡の調査がおこなわれた。いずれでも石斧は出土していない。ただし、間谷西2号墳の周辺からは石斧や石錐が出土した(今岡2009)。

12 「山本資料」によれば、昭和14年(1939)に松江市雜賀町に引越しされたらしい。これは傷痍軍人島根療養所の設立年にあたる。

13 「島根県史 一」「島根縣内發見の石器類」地名表(野津1921, 34~38頁)によると、八束郡内の磨製石斧発見地12箇所のうち9箇所が、「長谷川コレクション」に関わる。

14 明治38年(1905)、八束郡玉造村と湯町村が合併して成立。

15 「穴居遺蹟」とあるのは、横穴墓を示す。

16 松江市玉湯町の字名に関しては、松江市立玉湯資料館三宅博士氏と松江市教育委員会片岡詩子氏の教示を得た。

17 これらの叩き石と石錐は、柴田常恵が「玉湯村字林 磨石斧、錐石」としたものに相当するのである(柴田1910)。

18 「山本資料」(A-35-6-1)に「舟形棺ある藪の附近」との注記がある。このほか「大谷ノート」に「他に玉砾石三個?」とあるがこれらは所在不明。

19 乃木村大字乃木・上乃木・福富・内白各地区の字名は、「乃木郷土誌」所載資料10「明治初期の乃木地域地図」を参照した。なお、「皇國地誌」(1877年)には乃木村字名として、「香の木、矢の原、友田、新町、半原、江潤谷、浜、宇賀、後廻、当貫、高原、鐵冶屋」の12箇所があがっている。

20 宇賀I遺跡と宇賀II遺跡は、字「後廻」に位置する。「千代目衛目録」に「字當貫小字後廻」「字後廻」とあるものがある。『松江市遺跡地図』(松江市教委1991)のD030(散布地)は字「大空」「坪根」にあるだろう。

21 これは、柴田常恵が「乃木村字乃木小字宇賀 磨石斧」とした資料であろう(柴田1910, 370頁)。

22 「字矢原境下沢路上」と注記されているので、「八重垣道」「乃木村大字乃木字「大空」長門道分れより、同村大字乃木字「矢ノ原」にて大庭村大字大庭に接するまで」(乃木郷土誌編纂委員会, 272頁)の路上のことなので、現在の県立松江南高等学校周辺からその北側あたりと思われる。『松江市遺跡地図』(松江市教委1991)には、乃木二子塚古墳に近接し

て「下沢遺跡」(D001)があるが、これは字「二子塚」「茶山」に位置し、「八重垣道」には接しない。

23 柴田常恵が「同(八束)郡同(乃木)村字福富(農林校敷地)」と記録したものか(柴田1910)。

24 柴田常恵が「同(八束)郡同(乃木)村字乃白小字御田原 磨石斧」と挙げたものであろう(柴田1910)。

25 旧津田村の耕地整理は、明治43年(1910)八束郡長熊谷頼太郎からの郡令で指示された村は制定過程で計画立案され、大正8年(1919)度に完了した(津田・古志原郷土誌執筆専門委員会1982)。

26 川津村は明治36年(1903)に、西川津村と東川津村が合併して設立された。

27 ただし「山本資料」(A-35-30)には須義神社の南側に出土石マークが記されている。「路傍の石屑を積んだなか」とある。

28 注記には採集年次が記されていないが、「水道鉄管工事の際/上げられていて」とあるから、明治28年(1895)計画され、大正7年(1918)に通水した松江市水道事業に関連する出土品とみてよい。「山本清考古資料」には「大正」とあり、「このあたりは埋立た土と思われるの他から運ばれて埋っていたものと思うとのこと」という長谷川愛雄氏の言が記録されている。

1927年8月発行「最新松江市全圖」(松江市立圖書館蔵)を見ても、須衛都久神社境内地は宍道湖岸に面しており、ここが先史時代の遺跡とは信じ難い。

29 この資料の注記には、「児童家庭訪問/帰途」とある。『久利小学校史』(同編集委員会1980)の在職教員名簿に、長谷川愛雄氏の名は見えないが、「波根小学校百年史」(同編集委員会1976)によれば、長谷川愛雄氏は明治44年(1911)に波根小学校に在籍されていた。住所は「八束・乃木」、ただし「休職」だった(同書88~92頁)。愛雄氏は、明治43年3月26日に某校を卒業されたことが「乃木西ノ原」採集石器の注記でわかる。これが島根県師範学校(松江市外中原町)とすると、卒業翌年の赴任地である。その後、大正2・3年度(1913~15)は八束郡掛屋小学校、大正4~7年度(1915~19)には津田小学校に奉職されていた。『津田小学校教育百年史』(津田小百年記念事業実行委・津田小1975)掲載の「津田小学校旧職員名簿」(22~24頁)および松江市教委・松本浩氏のご教示による。

なお、明治時代末年に家庭訪問が行われていたことがわかる点では、教育的にも興味深い資料であると思う。

30 ただしこの2つは、「島根県史 一」(野津1921)の「島根縣内發見の石器類」地名表(34~38頁)には掲載されている。

参考文献

- 赤澤秀則ほか 1983『出雲平野の集落遺跡Ⅰ』古代の出雲を考える3、出雲考古学研究会。
- 石原 聰 2004『彰古館北の調査』『出雲大社境内遺跡』大社町教育委員会、227~264頁。
- 石原 聰・露梨靖子 2005『庵藏山遺跡』大社町立大社小学校改築事業に伴う発掘調査報告書、大社町教育委員会。
- 出雲市教育委員会 1956『出雲市の文化財』出雲市文化財調査報告、第1集。
- 出雲市教育委員会 1993『出雲市遺跡地図』。
- 伊藤菊之輔編 1980『島根県人名事典』国書刊行会。
- 今岡一三 2009『御崎谷遺跡 間谷東遺跡 浅柄北古墳 間谷西II遺跡 間谷西古墳群』一般県道出雲インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ、島根県教育委員会。
- 小村尚司 1982『大社考古学の覚書』『大社の史話』第42号、大社史話会、16~19頁。
- 梶谷 実 1974a『佐々鶴城伝』『大社の史話』第2号、大社史話会、7頁。
- 梶谷 実 1974b『大社の小字名』『大社の史話』日御碕特輯号、大社史話会、15~16頁。
- 加藤義成 1962『修訂出雲國風土記研究』今井書店(改訂3版1981年発行)。
- 久利小学校史編集委員会 1980『久利小学校史』久利小学校。
- 柴田常憲 1910『出雲雜記(一)』『東京人類學會雜誌』292号、東京人類學會、370~372頁。
- 島根県教育委員会 1992『増補改訂 島根県遺跡地図II(石見編)』。
- 島根県教育委員会 2003『増補改訂 島根県遺跡地図I(出雲・隠岐編)』。
- 関 和彦 1999『「出雲國風土記」註論 その四 神門郡条』『古代文化研究』第7号、島根県古代文化センター、1~98頁。
- 大社町史編纂委員会 2002『大社町史 史料編(民俗・考古資料)』大社町。
- 大社町史編纂委員会 2008『大社町史 中巻』出雲市。
- 立原久綱編 1933『郷土資料 島根叢書』第2篇、島根県教育會。
- 津田・古志原郷土誌執筆専門委員会 1982『津田・古志原郷土誌』津田・古志原郷土誌編集委員会。
- 津田小学校百年記念事業実行委員会・松江市立津田小学校 1975『津田小学校教育百年史』松江市立津田小学校。
- 中島栄一 1983『石冠・土冠』『縄文文化の研究9 縄文人の精神文化』雄山閣出版株式会社、149~169頁(第2版、1995発行)。
- 西山和宏編 2003『出雲大社 社殿等建造物調査報告』大社町教育委員会。
- 乃木郷土誌編纂委員会 1991『乃木郷土誌』松江市乃木公民館。
- 野津左馬之助 1921『島根縣史 一』先史時代・神代、島根縣内務部島根縣史編纂掛。
- 野津左馬之助 1924『島根縣史 四』古墳、島根縣内務部島根縣史編纂掛。
- 花谷 浩 2011『瓦礫陶拾遺 一明治大正期のある好古家の遺産』『島根考古学会誌』第28集、島根考古学会、103~108頁。
- 波根小学校百年史編集委員会 1976『波根小学校百年史』大田市立波根小学校。
- 歩兵第六十三聯隊史編纂委員会 1974『歩兵第六十三聯隊史』同刊行委員会。
- 松江市誌編纂委員会 1962『新修松江市誌』松江市。
- 松江市教育委員会 1991『松江市遺跡地図』。
- 村上壽夫 1903『出雲、石見の郡名について』『山陰新聞』明治36年1月1日号(のち、奥原碧雲編1926『八東郡誌』、および、立原久綱編1933『郷土資料 島根叢書』第2篇、島根県教育會、9~12頁、に再録)。
- 山本 清 1995『古代出雲の考古学 一遺跡と歩んだ70年』ハーベスト出版。

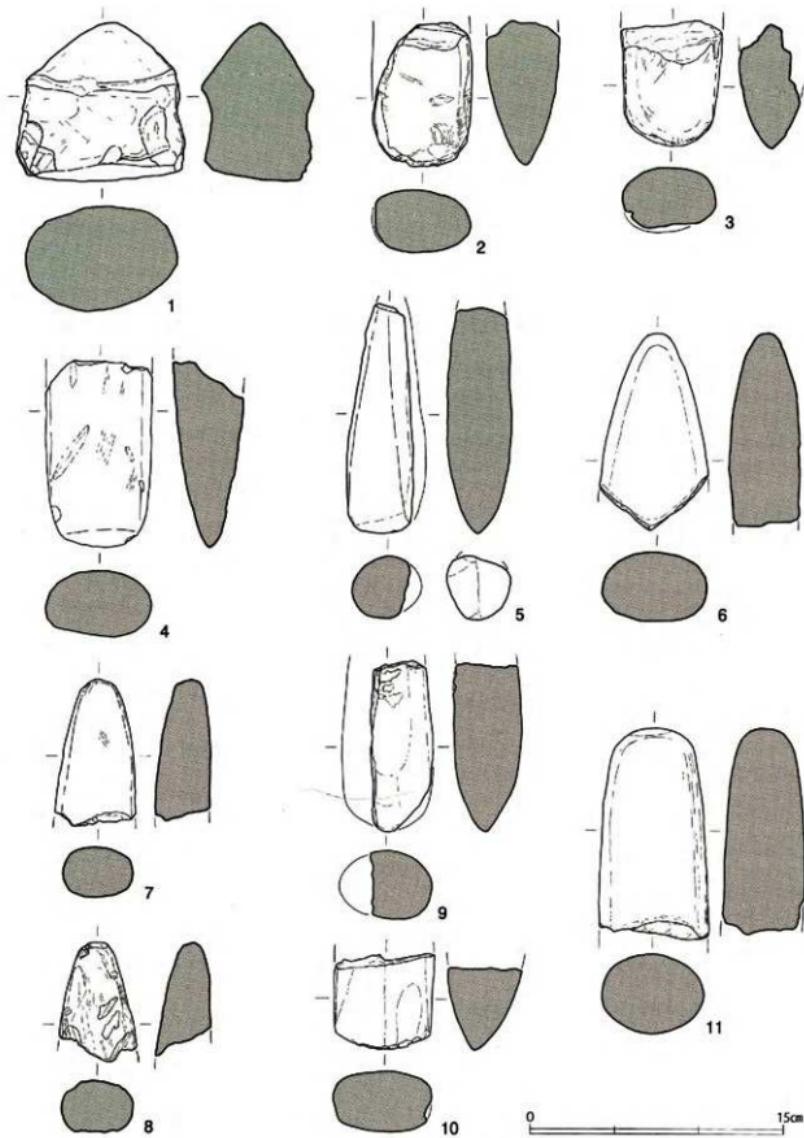


図2 磨製石斧など (1:3)

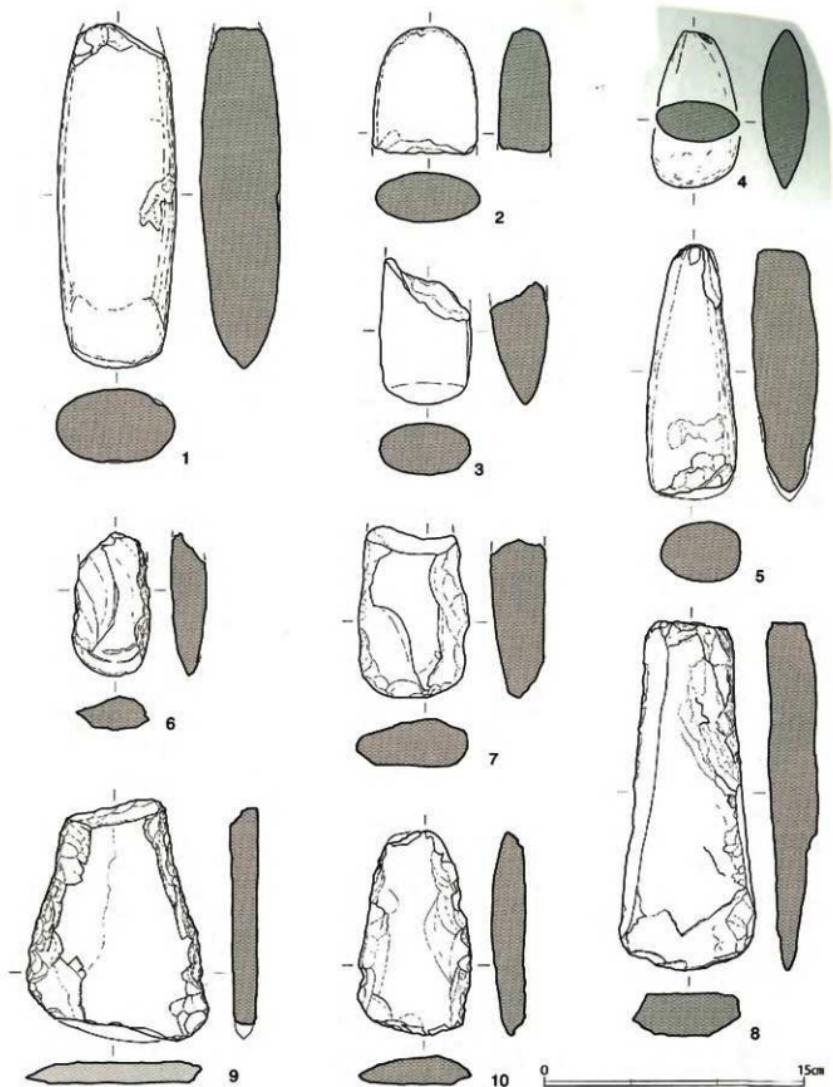


図3 磨製石斧と打製石斧 (1:3)

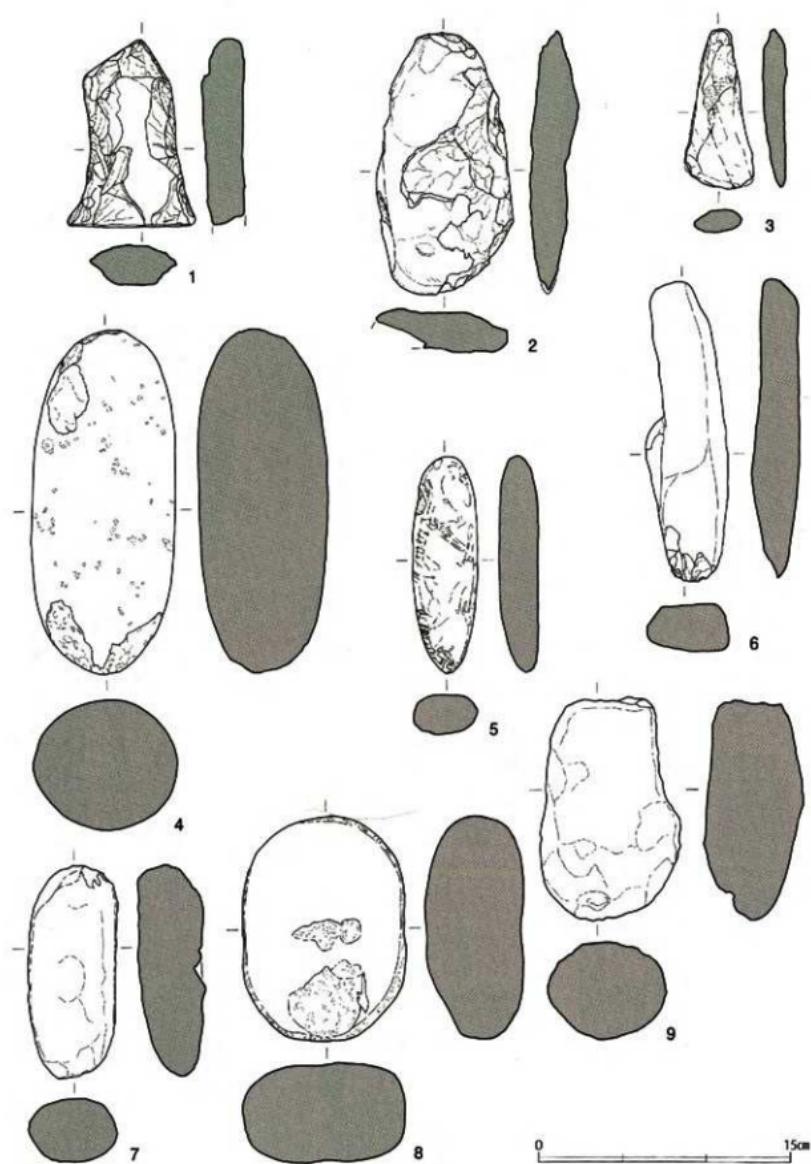


図4 打製石斧と叩き石 (1:3)



図5 叩き石・石鎌・砥石 (1:3)

長谷川千代衛・愛雄氏収集石器一覧

旧郡名	旧町村名	注記・目録内容 *1	遺物種類	存否	採集年次 *2	文書記載内容 *3	博物番号
葛川郡	杵築町						
	【杵築】 [杵築/大社/文庫北方/谷?]	石冠	○	1910以前	「大谷」9頁	2-1	
	杵築【】 [杵築鹿倉山] [来待石]	砥石	○		「大谷」17頁	5-10	
	「杵キ(墨書き) 大社町(ナカグラ山?) 愛雄中学生時代?」	打製石斧?	×		「山本」A-35-34		
	【大社直線道採集】	磨製石斧破片	×		「大谷」24頁, 「山本」A-35-33		
知井宮村	【知井宮村字間合ニテ同村入/奥井新市採集/時ハ明治卅六年七月二十日也 閃綠岩】	磨製石斧破片	×	1903	「大谷」20頁, 「山本」A-35-32		
朝山村	ヒノ川郡/上朝山ヒロ(源か)/コモリ穴岩	砥石	○			5-11	
八東郡	玉湯村						
	八東郡湯町村大字林字なか□□(くらか)/明治□□(廿七?)年七□(月)か□(二か)十九日【玉湯】	叩き石	○	1894	「大谷」13頁	4-5	
	林【玉湯】 [林?] 石鍤	石鍤	○		「大谷」14頁	5-5	
	【八東郡玉湯村大字玉造/施に玉紙石三個?】 「舟形棺ある敷の附近」	筋砥石?	○	1905以降	「大谷」17頁, 「山本」A-35-6	5-14	
	四十二年十二月八日/八東郡玉湯村大字玉造/大字林村字根尾越/岩畠ヲ南ニ距ル約老町ニテ/採取ス 【玉湯】	叩き石	○	1909		4-4	
	明治四十二年/十一月廿三日/八東郡玉湯村/大字玉造/字大門/穴居遺蹟下ニテ採取	自然礫	○	1909			
	【玉湯】 打製石斧	打製石斧	○			3-6	
乃木村							
乃木、上乃木	八東郡乃木村大字乃木/宇丸山 明治廿五年五月/野津仁之助拾得/明治廿二年四月/十八日仁之助氏ヨリ譲与ツ受 ^{タメ} [秦湖]	叩き石?	○	1892 (1909)			4-7
	八東郡乃木村大字乃木當貫/小字カヂヤ/明治三十一年八月	自然礫	○	1899			
	三十四年一月十一日/西ノ原	砥石?	○	1901		5-12	
	八東郡乃木村古乃木/長九郎谷石/発見人八東郡津田村大字古志原/生馬丈一郎/明治廿八年五月九日/免見	自然礫	○	1901			
	八東郡乃木村大字乃木/字番貫口/下屋敷附近/明治四十一年四月四日得	自然礫	○	1907			
	出雲國八東郡乃木村/大字乃木字当貫/レイクワ小路坂/明治四十年/二月十一日採取	叩き石	○	1908		4-6	
	マス子/櫛枝/作福/島氏ニ/報告/折/字貫 /明治四十年/三月八日/得	砥石	○	1908		5-15	
	宇賀神社/櫛木伐採/奏上/トキ/字貫 /明治四十一年/三月九日得	叩き石	○	1909		4-8	
	明治四十二年/十一月三日採取/八東郡乃木村大字乃木/字水無尻/千代衛/愛雄	叩き石	○	1910		4-9	
	明治四十三年三月廿六日/愛雄卒業奏上祭/日 西ノ原坂路ニテ採取/千代衛/愛雄	叩き石	○	1910		4-9	
	大正二年八月十二日/出雲國八東郡乃木村/大字乃木字字貫/穴地蘆道ニテ	打製石斧破片	○	1913	「山本」A-35-17	3-7	
	出雲國八東郡/乃木村大字/乃木字字貫/長谷川愛雄採取/大正三年十一月/十七日/野代神社大口中得之	自然礫	○	1914			
	八東郡乃木村乃木/西乃原坂下ニテ拾得/大正六年八月廿五日	打製石斧	○	1917	「山本」A-35-19	3-9	
	昭和一、二、□(四か)、一七八東郡乃木村字貫	石器か疑問	○	1936			
	大正二十年廿四日/八重垣神社御遷宮/日/神社ニ零拝シ帰路八東郡乃木村大字乃木字/上乃木小字矢原坂下沢/路上ニテ得タリ	叩き石	○	1913	「大谷」10頁, 「山本」A-35-24	5-2	
	四十三年六月廿四日/八東郡乃木村/大字乃木字京塚/西ノ烟	叩き石	○	1910	「大谷」13頁	5-1	
	〔明治三十四年七月二十八日受之/乃木村乃木小字坪根/野津唯次郎内(袋内)/石砥様ノモノ〕	砥石?	×	1901	「大谷」19頁		
	坪根□/上乃木/明治三十八年/五月十一日	砥石	○	1905	「大谷」19頁, 「山本」A-35-3	5-13	
	(記なし) [乃木?]	石器?	○		「大谷」12頁	5-4	
	[乃木村字西ノ原新繩手 明治四二、一〇、三一]	打製石斧	×	1909	「大谷」15頁, 「山本」A-35-22		

旧郡名	旧町村名	注記・目録内容 *1	遺物種類	存否	採集年次 *2	文書記載内容 *3	博物番号
乃木・上乃木	八東郡乃木村/大字乃木西原/大正五年/八月廿日	磨製石斧破片	○	1916	「大谷」21頁, 「山本」A-35-21	2-2	
	【乃口(木)】	打製石斧	○		「大谷」22頁, 「山本」A-35-20	3-8	
	宇質【乃木】《乃木》	磨製石斧	○		「大谷」23頁, 「山本」A-35-18	2-4	
	出雲國八東郡乃木村大字乃木/堅田路上 /明治廿九年十月十二日収	磨製石斧	×	1896	「目録」石第四号		
	出雲國八東郡乃木村大字乃木字宇質/藤原矩忠宅前路上/明治卅二年四月廿七日収	磨製石斧	×	1899	「目録」石第五号		
	出雲國八東郡乃木村大字乃木字宇質/周藤雅市宅道路上字質神社正遷宮/一周年紀念口當る/明治卅三年五月十一日収	磨製石斧	×	1900	「目録」石第八号		
	出雲國八東郡乃木村大字乃木字宇質/小字後追 周藤嘉右衛門屋敷内露出土 /明治三十四年三月十日発見 之ヲ受立会人/藤石南門/立貢太郎	磨製石斧	×	1900	「目録」石第十号		
	出雲國八東郡乃木村大字乃木小字坪根 野津唯次郎邸内 /三十四年七月十八日受之	砥石	×	1900	「目録」石第十三号		
	出雲國八東郡乃木村大字乃木字後追/周藤嘉右衛門 父太平免 /三十四年七月廿四日受之	磨製石斧	×	1900	「目録」石第十四号・十五号		
	八東郡乃木村大字乃木字宇質(口)(立/カ)谷/藤原矩忠 宅前路傳子発見 明治三十四年八月廿八日拾収ス	磨製石斧	×	1900	「目録」石第十六号		
福富	全郡乃木村大字乃木字大門町/明治三十八年五月十五日 収得ス	磨製石斧	×	1905	「目録」石第十六号		
	八東郡乃木村大字乃木字當貫町中下屋敷附近明治四十年四月四日得	自然礫?	×	1907	「山本」A-35-23		
	福富【福富】	磨製石斧破片	○		「大谷」14頁, 「山本」A-35-26	2-5	
	福富【福富】《福富》	磨製石斧破片	○		「大谷」21頁, 「山本」A-35-27	2-3	
	福富【福口(富)】《乃木村/福富》	磨製石斧破片	○		「大谷」24頁, 「山本」A-35-25	2-6	
乃白	出雲國八東郡乃木村大字福富/宇乘越舟木松次郎宅西脇/坂(旧道)/立会人同上 明治卅二年十月廿八日収	磨製石斧	×	1899	「目録」石第七号		
	出雲國八東郡乃木村大字福富字/曲り木小川畔/ 三十四年七月一日拾取	磨製石斧	×	1900	「目録」石第十二号		
	神立遺跡 明治四十年五月十三日採取	自然礫?	○	1907			
	乃木/野白	磨製石斧破片	○		「大谷」14頁, 「山本」A-35-5	2-8	
	【乃木村野白/御田原】	磨製石斧破片	○		「大谷」19頁, 「山本」A-35-4	2-7	
大庭村	出雲國八東郡乃木村大字野白(播音ミケシ)西山/俗ニ 齊賀力釜ト称ス/古墳ヨリ北菴下路上/明治卅二年十月廿八日収/立会人同村高橋熊太郎/舟木保市	磨製石斧	×	1899	「目録」石第六号		
	出雲國八東郡大庭村大字大庭字チダ/路上 明治卅三年九月十一日収/立会人 中嶋慶太郎氏 /其後青戸明江氏へ贈ル	磨製石斧	×	1900	「目録」石第九号		
	六所神社東 /三十七年九月三日	自然礫?	○	1904			
津田村	八東郡津田村大字東津田/字神守殿ニテ耕地整理/□□(發カ)標ニシテ [] / [] 四月廿□(九)日	叩き石	○		「大谷」11頁, 「山本」A-35-12	5-3	
	八東郡津田村大字東津田字神守殿/大正七年三月廿五日/耕地整理ノ際/発掘セリ	磨製石斧破片	○	1918	「大谷」14頁, 「山本」A-35-11	2-9	
	八東郡津田村大字東/津田同桂峰ニテ/拾得ス /大正八年六月廿八日	磨製石斧破片	○	1919	「大谷」19頁, 「山本」A-35-13	2-10	
	明治四十一年十二月廿六日/八東郡津田村大字/古志原字二子ニテ /拾得ス /愛雄【古志原】《古志原》	磨製石斧破片	○	1908	「大谷」20頁, 「山本」A-35-16	2-11	
	出雲國八東郡津田村大字古志原/山代神社前馬場路傍/三十四年三月廿八日収	磨製石斧	×	1900	「目録」石第十一号		
	【古志原】《古志原》	打製石斧	○		「山本」A-35-14	3-10	
	【古志原】	打製石斧破片	○		「山本」A-35-15	4-1	
	出雲國鳥根郡西川津村/尾茂祖谷 明治廿三年四月五日拾取/立会人 石倉鶴市 [磨製石斧] 鳥根郡西川津村尾茂祖谷/明治廿三年四月五日拾取/立会人 石倉鶴市/八東郡川津村櫻山麓西側にて/明治 白底色/研磨美]	磨製石斧	×	1890	「目録」石一号, 「大谷」21頁, 「山本」A-35-8	3-4	
持田村	出雲國鳥根郡西川津村/尾茂祖谷 明治廿三年四月五日拾取/立会人 石倉鶴市 [磨製石斧] 鳥根郡西川津村尾茂祖谷/明治廿三年四月五日拾取/立会人 石倉鶴市/八東郡川津村櫻山麓西側にて/明治 白底色/研磨美]	磨製石斧	×	1890	「目録」石一号, 「大谷」21頁, 「山本」A-35-8	3-4	

旧郡名	旧町村名	注記・目録内容 *1	遺物種類	存否	採集年次 *2	文書記載内容 *3	捜査番号
川津村		『松江神社跡の南の方の道路附近 ムカデ橋の先の岡』[附 属松の逸足の跡か]	石斧?	×	1896-1897	「山本」A-35-9	
講武村		講武村名分/貝塚 『木村嘉造(畠の地主)より譲受』	石鍬	○		「大谷」17頁, 「山本」A-35-29	5-6
		八東部/講武村/名分/貝塚	石鍬	○		「大谷」17頁	5-7
		〔講武名分貝塚〕 『木村嘉造(畠の地主)より譲受』	磨製石斧	×		「大谷」18頁, 「山本」A-35-29	
佐太村		八束郡佐太村/大字佐太宮内/佐太橋北(西側)/堀上ニテ 拾取/四十二年七月十一日/愛雄	磨製石斧破 片	○	1909	「山本」A-35-28	3-2
千鶴村		全部千鶴村大字千鶴/佐佐木社北後田中路傍/明治三十七 年十二月廿四日拾取ス	磨製石斧	×	1904	「目録」石第十六 号	
		【千鶴】	自然礫	○		「山本」A-35-31	
片江村		大正九年十二月廿九日/八東郡/片江村大字菅(ママ)浦/ 路上ニ於テ/拾得	打製石斧	○	1920	「大谷」12頁, 「山本」A-35-30	4-2
不明		(記なし) 【八東郡?】	石斧?	○		「大谷」15頁	4-3
松江市		松江市東茶町西京橋通り交差点/五六開東にて水道鉄管 工事の際/上げられていた 長谷川愛雄(氏奇贈)	磨製石斧	○		「大谷」8頁, 「山本」A-35-10	3-1
		【松江篠山附近】	打製石斧?	×		「大谷」23頁	
鮫石郡	波多村	【鮫石 波多村/間】	磨製石斧	×		「大谷」17頁, 「山本」A-35-36	
大原郡	日登村	大原郡日登村大字東日登/小林重義庭上/明治三十七年四 月廿三日朝 収得ス	石鍬	×		「目録」鐵第六号	
仁多郡	横田村	【仁多郡横田 横田川】	磨製石斧?	×		「山本」A-35-35	
石見國							
邇摩郡	久利村	児童家庭訪問/帰途 /石見國ニマ郡久利村/大字松代字 平野原二合口/ニテ之得 /明治四十五年六月一日	磨製石斧破 片	○	1912	「大谷」24頁, 「山本」A-35-39	3-3
安濃郡	川合村	安濃郡川合村/大字南 学校//裏道 /四五、五、三	石鍬	○	1912	「大谷」14頁, 「山本」A-35-38	5-9
		安濃郡川合村大字南/古田勘十郎氏/裏ノ畠ヨリ/発掘ス /明治四十五年五月四日	磨製石斧	○	1912	「大谷」23頁, 「山本」A-35-37	3-5
隱岐國							
知夫郡	黒木村	四十一年六月十六日/隱岐国知夫郡黒木村/大字美田字居 ノ牧/穴居遺跡下海岸	自然礫	○	1908	「山本」A-35-40	
日向國							
鬼湯郡	妻村	日向國鬼湯郡妻村/妻神社東部付近路上/立会人 長田鉄 見 明治廿八年四月廿七日收	打製石斧	×		「目録」石第二号	
	石貴村	日向國鬼湯郡石貴村/大山祇命御住居跡/立会人井上勇雄 /長田鉄見 明治廿八年四月廿七日收	分 細 石(ママ)	×		「目録」石第三号	

旧都名	旧町村名	注記・目録内容 *1	遺物種類	有否	採集年次 *2	文書記載内容 *3	排図番号
西白杵郡							
田原村							
	日向国西白杵郡田原村/熊野神社附近/明治廿八年 収	石鏹		×	1895	「目録」巻第二号	
上野村							
	日向国西白杵郡上野村大字下野/宇北窪畠ヨリ出 明治廿八年三月廿四日譲受/(明治十年頃 同村江藤又四郎/発掘セリ)	石鏹		×	1877 (1895)	「目録」巻第三・四号	
不明							
	【日向/□□□】	石鏹	○				5-8
美濃国							
武儀郡							
谷口村							
	美濃国武儀郡谷口村/矢落街道(二重籠ケシ)/明治十八年 金鑑/氏取ラル (金鑑有/夫君ヨリ収)	石鏹		×	1885	「目録」巻第一号	

*1 資料に記載された墨書きの内容および現存しない資料については「千代衛目録」の記述。大谷による追記は()内に示した。貼紙の内容は【 】で示した。「大谷ノート」の記載は〔 〕で、「山本考古資料」の記載は『 』で表記した。

*2 別の採集者から受領した年次は()で示す。

*3 「千代衛目録」は「目録」、「大谷ノート」は「大谷」、「山本考古資料」は「山本」と略した。

執筆者紹介

三原一将 出雲弥生の森博物館 主任

高橋 周 出雲弥生の森博物館 研究員

原 俊二 出雲弥生の森博物館 博物館学芸係長

西尾克己 烏根県古代文化センター長

花谷 浩 出雲市文化環境部 学芸調整官

出雲弥生の森博物館研究紀要 第2集

発行日 2012年3月23日

編集・発行 出雲弥生の森博物館
(出雲市文化環境部文化財課)
〒693-0011

島根県出雲市大津町2760

TEL. 0853-25-1841

FAX. 0853-21-6617

E-mail yayoi@city.izumo.shimane.jp

Home page <http://www.city.izumo.shimane.jp/yayoinomori>

印 刷 有限会社 西村印刷



よすみちゃん

